

第41図 FKJ05-4 遺構③-2 (S=1/50)

第3節 FKJ06-1 (-1・2・3・4) 地区の調査

FKJ06-1地区の概要 この調査区は、福井城の百間堀等二つの堀を跨ぐ位置に当たる。堀内部は調査の対象から除外され、また、一部に福井市文化財保護センター対応の調査地 (FKJ06-6-2) があるため、調査区は4箇所に分断された。これらを南側から FKJ06-1-1~4地区とする (第1・2図)。なお、FKJ06-1地区と FKJ05-4地区の間にも福井市文化財保護センター対応の調査地 (FKJ06-6-1) がある。

FKJ06-1-1地区は百間堀南岸、FKJ06-1-2地区は百間堀にかかる東三ノ丸三崎門へと続く土橋、FKJ06-1-3・4地区は堀の北岸に当たる。主要な遺構として区画溝と砂利敷道路、石垣などを確認したが、後世の改変が著しくそれ以外の遺構はほとんど消滅していた。

以下、南側から調査地区ごとに説明する。

1 FKJ06-1-1地区 (第42図)

主要な遺構は、百間堀南岸石垣、砂利敷道路、区画溝611006などである。

百間堀南岸石垣 (第43図) は、JR福井駅高架化に伴う調査 (FKJ00-6) にて検出した百間堀南岸石垣の東側に隣接し、福井駅西口地下駐車場建設に伴う調査 (FKJ02-3-06-11) にて検出した百間堀東側石垣と一連となる石垣である。検出した部分は、ほぼ東西方向に直線的に延びており、延長約16.5mに及ぶ。石垣石材は2~4個が積まれた状態で残存しており、その高さは0.8~1.6mである。石垣下端は、概ね標高4.7mであるが、調査区東端付近では標高5m程度へと地盤が高くなる。石垣最下段の石材は根石として、0.2~0.5m石垣前面から突出するように配置され、その前面から上面に土を被せている。ただし調査区東端付近については、地盤が比較的固く締まるものであり、石垣最下段石材の突出が小さく他の根石とは様相が異なる。根石を土で覆うと見かけ上の石垣下端は標高約5mであり、調査区東端付近の地盤高と揃うことから、調査区東端付近の石垣最下段の石材は露出していたことが考えられる。石垣の基礎構造である副木組は残存しなかった。使用される石材はいずれも笏谷石であり、80個近い石材のうち40個以上に、20種以上の刻印が施されている。なお、刻印の詳細は00-6の報告時にまとめて扱う。

砂利敷道路 (第42図) は、石垣の南側に沿い東西に延びる。検出長約14m、幅7.5m前後であり、路面は1面のみ確認した。後世の改変が著しい。石垣背後の石列も路面を破壊する近代以降の改変である。

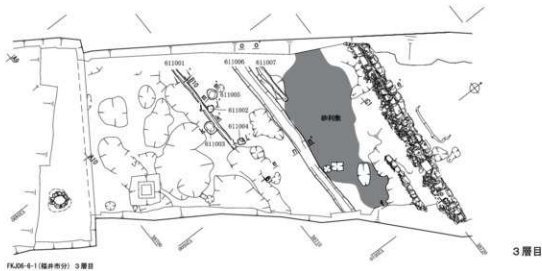
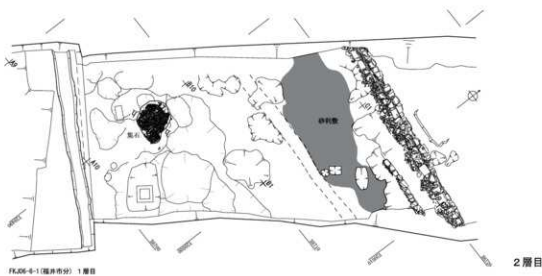
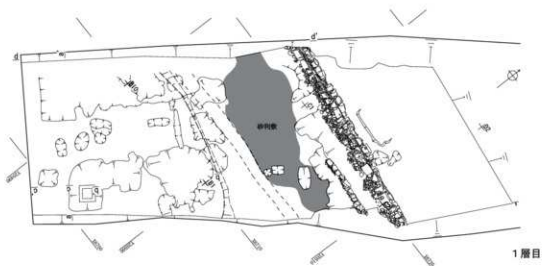
区画溝611006は、道路南側の側溝に当たり、その南に展開する屋敷地との境をなす。この溝と石垣は平行でないため、道路幅が西に向い広くなるが、これは屋敷地の規模・形態が影響しているようである。

屋敷地も後世の改変が著しく、屋敷地に関わる遺構は、区画設備の痕跡かと思われる区画溝611006と平行する溝611001等と、FKJ06-6-1地区 (福井市分) にて検出した石組井戸のみである。

この屋敷地は、慶長18 (1613) 年頃の絵図では吉田与兵衛邸として表記される。17世紀半ば以降の絵図では、南側の屋敷地と統合して鶴田清左衛門邸とされるが、寛文の大火 (1669年) 以降には火除け地である御菜園とされる。御菜園とされる際、建物の撤去だけでなく盛土造成が行われており、同時に大火時の焼土や大量の瓦、無用の礫 (第46・47図) 等が廃棄されている。

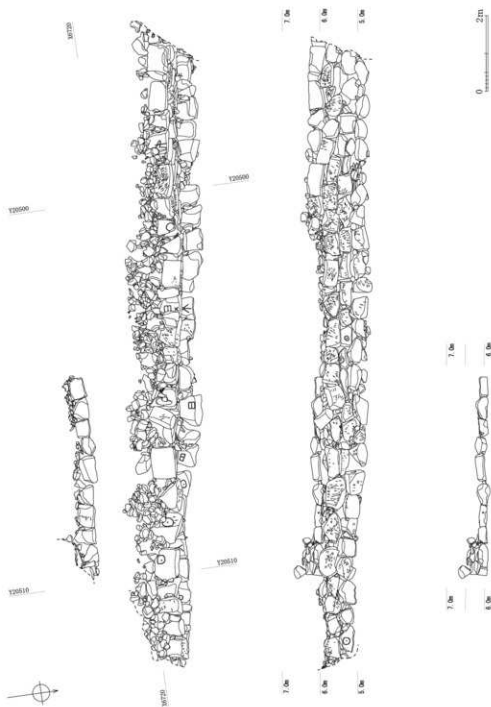
2 FKJ06-1-2地区 (第48図)

百間堀にかかる東三ノ丸三崎門へと続く土橋と、その両側の堀を一部検出した。検出した土橋は、JR福井駅高架化に伴う調査 (FKJ00-8) にて検出した南北方向に延びる土橋と接続する一連のものであり、調査区西端にてほぼ直角に屈曲し東西方向に延びる。土橋両側には石垣が残存するが、土橋上面は

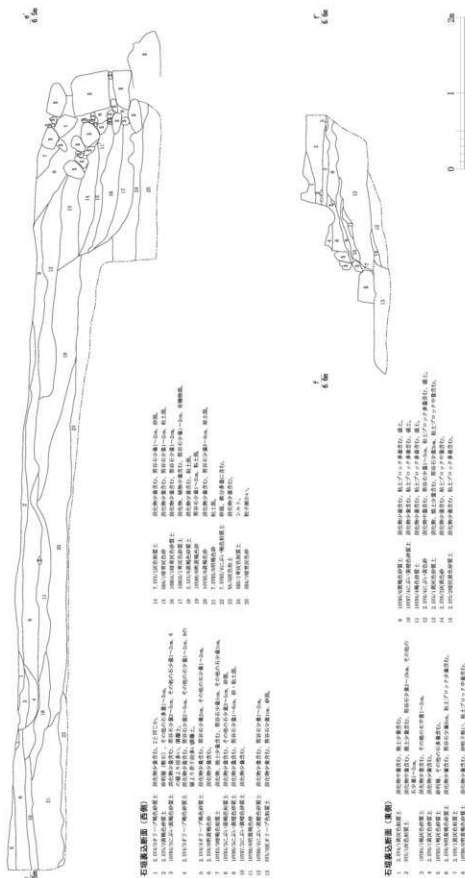


0 5m

第42図 FKJ06-1-1 遺構配置図 (S=1/300)



第43図 FKJ06-1-1 白間地南岸石垣 (S=1/100)



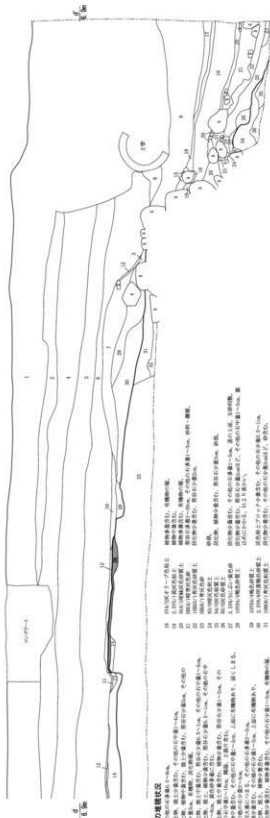
第44図 FKJ06-1-1 石垣基込断面図 (S=1/50)

石垣基込断面 (西側)

1. 土坑(1)埋没部遺構上
2. 土坑(1)埋没部遺構上
3. 土坑(1)埋没部遺構上
4. 土坑(1)埋没部遺構上
5. 土坑(1)埋没部遺構上
6. 土坑(1)埋没部遺構上
7. 土坑(1)埋没部遺構上
8. 土坑(1)埋没部遺構上
9. 土坑(1)埋没部遺構上
10. 土坑(1)埋没部遺構上
11. 土坑(1)埋没部遺構上
12. 土坑(1)埋没部遺構上
13. 土坑(1)埋没部遺構上
14. 土坑(1)埋没部遺構上
15. 土坑(1)埋没部遺構上
16. 土坑(1)埋没部遺構上
17. 土坑(1)埋没部遺構上
18. 土坑(1)埋没部遺構上

石垣基込断面 (東側)

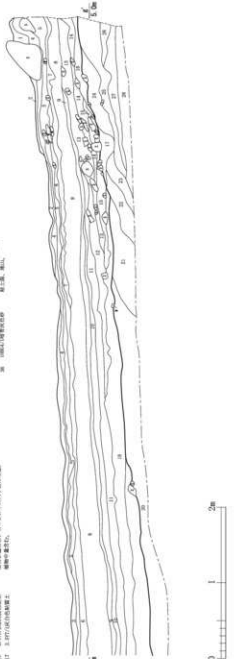
1. 土坑(1)埋没部遺構上
2. 土坑(1)埋没部遺構上
3. 土坑(1)埋没部遺構上
4. 土坑(1)埋没部遺構上
5. 土坑(1)埋没部遺構上
6. 土坑(1)埋没部遺構上
7. 土坑(1)埋没部遺構上
8. 土坑(1)埋没部遺構上
9. 土坑(1)埋没部遺構上
10. 土坑(1)埋没部遺構上
11. 土坑(1)埋没部遺構上
12. 土坑(1)埋没部遺構上
13. 土坑(1)埋没部遺構上
14. 土坑(1)埋没部遺構上
15. 土坑(1)埋没部遺構上
16. 土坑(1)埋没部遺構上
17. 土坑(1)埋没部遺構上
18. 土坑(1)埋没部遺構上



石垣遺構(西側)および筒倉の堆積状況

- 1 1974年(1)石垣遺構の浮出
- 2 1974年(2)石垣遺構の浮出
- 3 1974年(3)石垣遺構の浮出
- 4 1974年(4)石垣遺構の浮出
- 5 1974年(5)石垣遺構の浮出
- 6 1974年(6)石垣遺構の浮出
- 7 1974年(7)石垣遺構の浮出
- 8 1974年(8)石垣遺構の浮出
- 9 1974年(9)石垣遺構の浮出
- 10 1974年(10)石垣遺構の浮出
- 11 1974年(11)石垣遺構の浮出
- 12 1974年(12)石垣遺構の浮出
- 13 1974年(13)石垣遺構の浮出
- 14 1974年(14)石垣遺構の浮出
- 15 1974年(15)石垣遺構の浮出
- 16 1974年(16)石垣遺構の浮出
- 17 1974年(17)石垣遺構の浮出
- 18 1974年(18)石垣遺構の浮出
- 19 1974年(19)石垣遺構の浮出
- 20 1974年(20)石垣遺構の浮出
- 21 1974年(21)石垣遺構の浮出
- 22 1974年(22)石垣遺構の浮出
- 23 1974年(23)石垣遺構の浮出
- 24 1974年(24)石垣遺構の浮出
- 25 1974年(25)石垣遺構の浮出
- 26 1974年(26)石垣遺構の浮出
- 27 1974年(27)石垣遺構の浮出
- 28 1974年(28)石垣遺構の浮出
- 29 1974年(29)石垣遺構の浮出
- 30 1974年(30)石垣遺構の浮出

- 1 1974年(1)石垣遺構の浮出
- 2 1974年(2)石垣遺構の浮出
- 3 1974年(3)石垣遺構の浮出
- 4 1974年(4)石垣遺構の浮出
- 5 1974年(5)石垣遺構の浮出
- 6 1974年(6)石垣遺構の浮出
- 7 1974年(7)石垣遺構の浮出
- 8 1974年(8)石垣遺構の浮出
- 9 1974年(9)石垣遺構の浮出
- 10 1974年(10)石垣遺構の浮出
- 11 1974年(11)石垣遺構の浮出
- 12 1974年(12)石垣遺構の浮出
- 13 1974年(13)石垣遺構の浮出
- 14 1974年(14)石垣遺構の浮出
- 15 1974年(15)石垣遺構の浮出
- 16 1974年(16)石垣遺構の浮出
- 17 1974年(17)石垣遺構の浮出
- 18 1974年(18)石垣遺構の浮出
- 19 1974年(19)石垣遺構の浮出
- 20 1974年(20)石垣遺構の浮出
- 21 1974年(21)石垣遺構の浮出
- 22 1974年(22)石垣遺構の浮出
- 23 1974年(23)石垣遺構の浮出
- 24 1974年(24)石垣遺構の浮出
- 25 1974年(25)石垣遺構の浮出
- 26 1974年(26)石垣遺構の浮出
- 27 1974年(27)石垣遺構の浮出
- 28 1974年(28)石垣遺構の浮出
- 29 1974年(29)石垣遺構の浮出
- 30 1974年(30)石垣遺構の浮出



第46図 FKJ06-1-1 堆積状況② (S=1/50)



集石

- 1 10YR4/4褐色砂質土 炭化物、焼土少量含む。粘土アツク層。
- 2 10YR4/2灰褐色砂質土 炭化物中量含む。焼土少量含む。磨石石少量1cm。その他の石少量1-2cm。東西レンヂと対応。
- 3 10YR3/2黒褐色粘質土 炭化物、焼土、植物少量含む。その他の石少量1cm。有機物層。東西レンヂと対応。
- 4 5S/0灰色粘質土 炭化物、焼土少量含む。砂質。
- 5 2Y5/1灰色粘土 炭化物少量含む。砂質。東西レンヂ25と対応。



611001

- 1 10Y5/1オリーブ褐色砂質土 炭化物少量含む。



611002

- 1 2.5Y4/2赤オリーブ色粘質土 炭化物、焼土、植物少量含む。磨石石少量0.5cm。炭化物少量含む。下部に埋没物の層がわずく残存。その他の石少量7cm。アツク平している。2.5Y4/4(オリーブ)の鉄分を含む土は認められていない。2Y5/2(オリーブ)粘質土層に属す。



611003

- 1 2Y4/1灰色粘質土 炭化物少量含む。植物中量含む。磨石石少量1.2cm。No.3の遺跡。
- 1 2.5Y4/1暗オリーブ灰色粘質土 炭化物少量含む。その他の石少量2cm。No.3の遺跡。下部灰褐色で砂質土。



611004

- 1 3Y3/2オリーブ褐色粘質土 炭化物、焼土少量含む。磨石石少量0.5-1.5cm。その他の石少量1.5cm。遺跡C。



611005

- 1 2Y4/2赤オリーブ色粘質土 炭化物、焼土少量含む。磨石石少量0.5-1.5cm。遺跡D。2.5Y5/4黄褐色粘質土上に掘られている。
- 2 2Y4/2(オリーブ)褐色砂質土 炭化物少量含む。磨石石少量0.5cm。細粒。一番目の上部の土が上部に入っている。



611006

- 1 10YR4/2(2)黄褐色砂質土 炭化物少量含む。磨石石少量2-5cm。その他の石少量1-3cm。607層と対応多い。遺跡E。
- 4 2.5Y4/2オリーブ褐色砂質土 炭化物少量含む。磨石石少量1-2cm。507層と対応少ない。遺跡E。

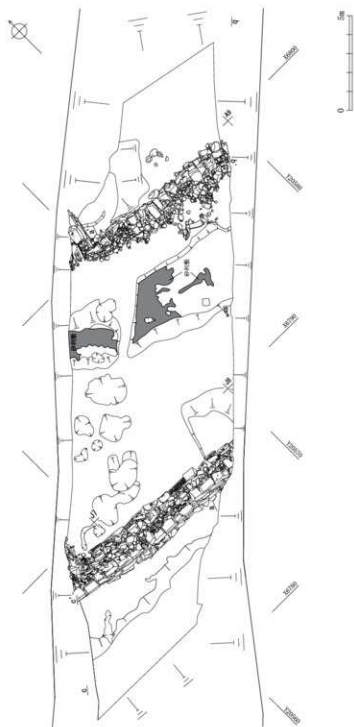


611007

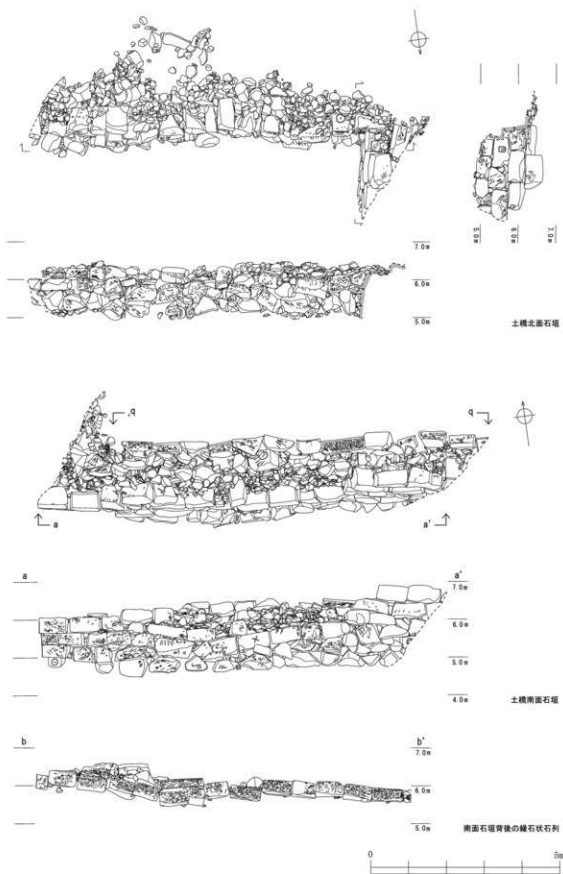
- 20 2.5Y4/4オリーブ褐色粘質土 炭化物少量含む。灰色粘土アツク層中量含む。溝の層上。
- 30 2.5Y4/1黄灰色砂質土 炭化物少量含む。溝の層上。
- 31 2Y3Y4/1(黄)灰色砂質土 炭化物少量含む。溝の層上。



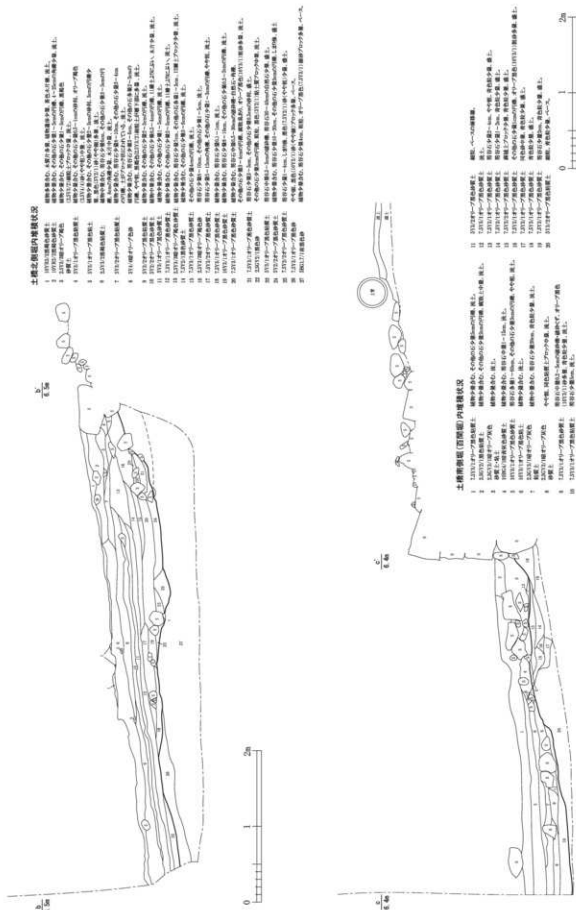
第47図 FKJ06-1-1 遺構 (S=1/40)



第48図 FKJ06-1-2 東三ノ丸土橋 (S=1/200)



第50図 FKJ06-1-2 東三ノ丸土橋石垣 (S=1/100)



第51図 FKJ06-1-2 東ノ丸土橋西側断面内堆積状況 (S=1/50)

後世の改変が著しく、僅かな範囲に道路面の砂利敷きが残存するのみである。土橋の構架は、土橋の中央付近となる部分を土養等で補強しつつ嵩上げし、ある程度の高さに達したら両側に石垣を数石分積み、これを繰り返すようにしていることが土層観察から確認される（第49図）。

土橋南面石垣（第50図）は、ほぼ東西方向に直線的に延びており、検出長10～11mに及ぶ。石垣石材は3～5個が積まれた状態で残存しており、その高さは1～2mである。石垣下端は概ね標高4.8mである。しかし、石垣最下段の石材は、根石として0.2～0.4m石垣前面から突出するように配置され、その前面に土が被せられる（第51図）。そのため、見かけ上の石垣の下端は標高5mとなる。石垣の基礎構造である胴木組は残存しなかった。石垣から前方1～2mの部分にて0.5m前後の段があり、それに沿い人頭大～石垣石材様の笏谷石が並んで確認された。これらは、表土掘削の際に崩落した石材として除去してしまっただけで、特に調査区中央付近から東側については石垣石材と同様な4個の石材が並ぶものであったことから、本来は石垣構築面を保護するために設置されたものであった可能性がある。石垣の背後には、道路側を正面とする緑石状の石列がある（第50図）。その緑石状石列は、検出長約10mで、1～2個の石垣石材よりやや小振りな石材が直線的に並べられる。

土橋北面石垣（第50図）は、西端ではほぼ直角に屈曲しており、南北2.5m・東西9mに及ぶ。石材は2～4個が積まれた状態で残存しており、その高さは1～1.8mである。石垣下端は概ね標高5mであるが、最下段の根石に土が被せられ、見かけ上の石垣下端は標高5.5mを前後する位置となる。胴木組等は残存しなかった。前回（FKJ00-8）の調査成果から、石垣の背後には南面石垣と同様な緑石状の石列があったものと見られるが、後世の改変のために残存しない。

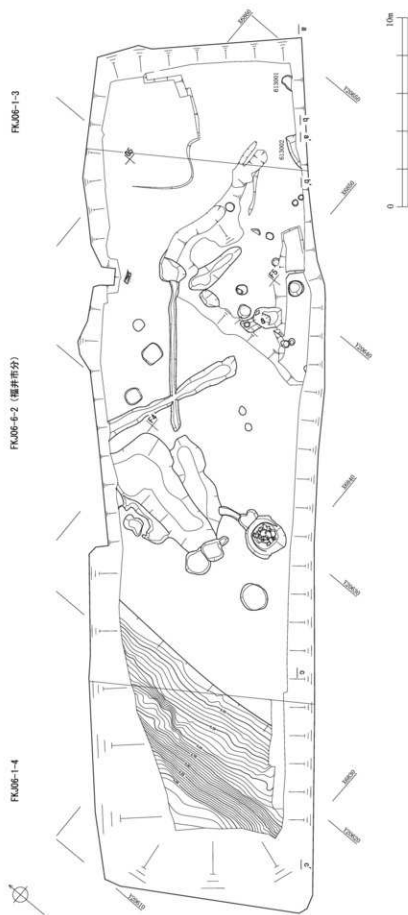
両石垣と緑石状石列に使用される石材は、いずれも笏谷石である。それらの石材の多くに刻印を確認した。南面石垣には60個近い石材のうち25個以上に20種以上、北面石垣には約50個のうち20個に10種以上、また石列は16個のうち2個に2種の刻印が施されている。刻印の詳細は00-8報告時に扱う。

この土橋は、絵図によると慶長18年頃から慶応年間に至るまで同様な表現であることから、石垣等の改修が為されていたとしても、その平面的な位置等に大きな変化は施されなかったようである。

3 FKJ06-1-3・4地区（第52図）

近代以降の改変が著しく、それ以前の生活面は残存しない。FKJ06-1-3地区の遺構は、各1基の井戸・土坑を確認したのみである（第53図）。FKJ06-1-4地区では、石垣付近からその前面に展開する堀底面の深部へと続く斜面を確認したに過ぎない。石垣は既に失われていた。なお、FKJ06-1-3・4地区間に位置するFKJ06-6-2地区（福井市分）では、石組井戸や土坑・溝等が確認されている。

FKJ06-1-3・4および06-6-2地区の位置は、東三ノ丸から堀を挟んで東側の屋敷地に当たる。築城当初、東三ノ丸の東に展開する外曲輪内に属す屋敷地であったが、17世紀半ばには新たな堀や人分門・北人分門等が設置され縄張が大きく変更されて、「（元）割場」地区の屋敷地となる。FKJ06-6-2地区の一部を除き生活面が大きく削平されるため屋敷地としての内容・屋敷境は不明であるが、周辺の状況や絵図などによると、FKJ06-1-3地区とFKJ06-1-4・06-6-2地区は2軒の屋敷地に分かれるようである。そして、FKJ06-1-3地区は、06-2地区にて確認した屋敷地と一連の敷地であり、FKJ06-1-4地区は、06-1-3地区の屋敷地に南接する屋敷地西側の堀際付近となる。なお、絵図に見える06-6-2地区に該当する屋敷地の名義は、築城時に近い慶長18（1613）年頃＝中川氏、17世紀半ば＝川越氏、17世紀後葉＝伊藤氏、18世紀前葉＝里見氏、19世紀前葉～幕末・慶応年間＝大井田氏と変遷する。



第52図 FKJ06-1・3・4, 6-2 (福井市分) 遺構配置図 (S=1/200)

第4節 FKJ06-2南側地区の調査

FKJ06-2南側地区の概要 FKJ06-2地区は、1996～1998年度に実施した「JR北陸線外2線連続立体交差事業および高架側道4号線街路工事に伴う調査」地点（以下、4号線地点）の南東に隣接する。4号線地点では、福井城北人分門の北側正面の堀・土橋とその北側に展開する屋敷地を検出した。今回の調査では、堀の延長部分と北人分門南側の桁形部分・その南側の屋敷地などを確認した。FKJ06-2南側地区とは、FKJ06-2地区のうち堀とその南側の調査区である（第2・55図）。

主要な遺構は、堀・石垣などの北人分門に関わるもの、他、砂利敷道路・上水道関連遺構・井戸・廃棄土坑などの屋敷地や街区に関わるものを検出した。しかしながら、過去の鉄道敷設に伴う著しい攪乱のために、遺存状況は良好と言えない。

この調査区では、福井城期（近世）およびそれ以前の遺構をそれぞれ複数面分確認した。以下、確認順に説明する。

1 近世（第55・56図）

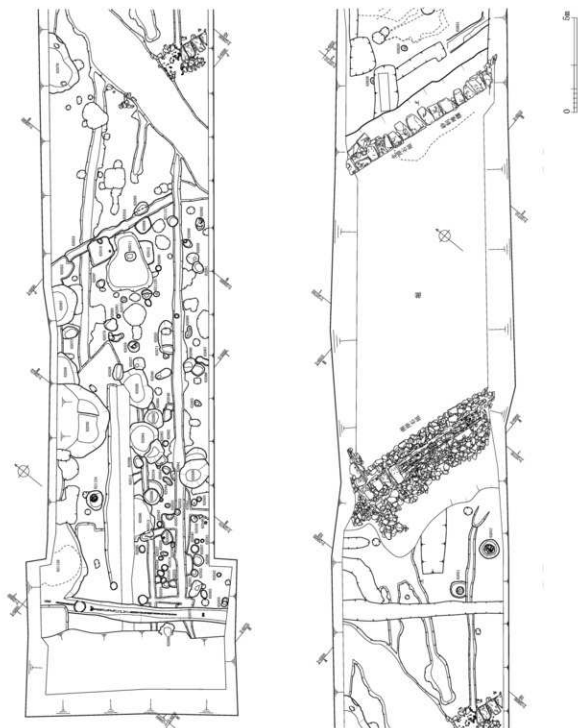
近世の遺構は、攪乱層および部分的に残存する包含層を除去し、最初に確認した遺構（近世①）・近世①の検出面下の厚さ0.1m程度の黄褐色砂質土とその下の薄い暗褐色砂質土層を除去した後に確認した遺構（近世②）・桁形部分の石垣などを取り除いた後に確認した北人分門設置以前の遺構（近世③）である。これらは、多くの攪乱や遺構の重複のために遺構面の展開が捉えられない部分が多かった。近世①～③と分けて説明するが、必ずしも面として把握し得ていないため、各遺構の時期的な判断について誤認のある可能性は否めない。

なお、近世①・②の段階には北人分門や堀が既に整備されているため、残存する桁形部分の石垣や堀などが当初の姿を残すものか、改修を重ねた新たなものであるのかを判断することが困難であるため、石垣や堀などについては各段階の説明と分けて記述する。

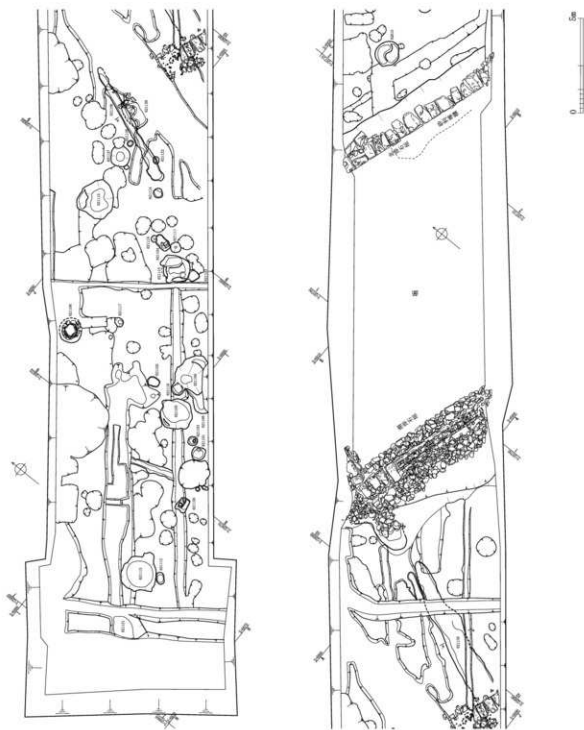
石垣（第58図） 石垣は堀の南北兩岸にて確認したが、大半の石材が抜き取られた状態であった。

北岸の石垣は、ほぼ東西方向に直線的に延びており、検出長約9mに及ぶ。石垣石材は、一部に2個積まれた状態で残存するが概ね1個のみであり、その高さは0.4～0.9mである。石垣下端は、標高6m前後ではほぼ水平に揃う。なお、石垣背後にある砂利敷道路路面が標高7.2m前後であり、石垣天端と高さが揃うものであったとすると、本来の石垣の高さは1.2m前後であり、3個程度の石材が積まれていたことが推測される。最下段の石材は、根石として埋め込まれていた形跡が確認されず、正面が露出していたようである。石垣基礎構造は、胴木組などは確認されず、地山の砂質土上に黄褐色粘質土に黒色土を混ぜた土を5～8cm程度の厚さで敷くのみで、その上に石垣石材を設置している。

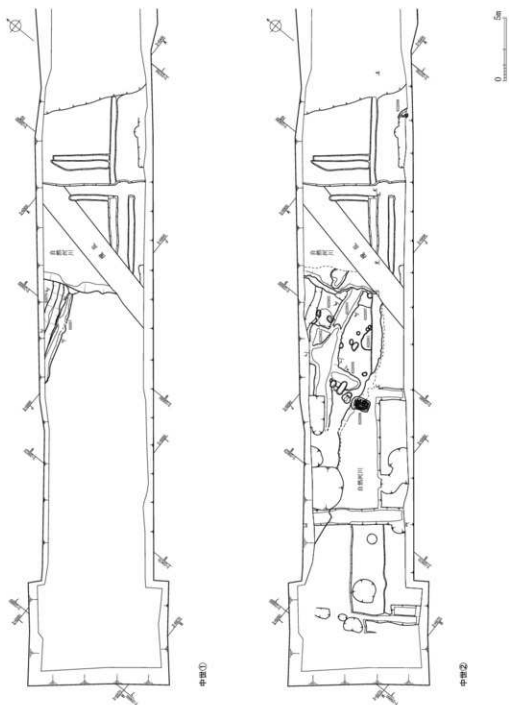
南岸の石垣は、東西方向に延びる石垣と土橋東側の南北方向に延びる石垣が、ほぼ直交して入角を形成しており、それぞれ東西1.8m・南北2.3m分を確認した。東西に延びる石垣は4個程度が並んで残存したに過ぎないが、裏込栗石や胴木組が比較的良好に残存し延長約10mに及ぶ。その胴木組の構造は、胴木を2列平行に配置し、杭で固定するのみの枕胴木組である。胴木組は、地山の砂層を幅約1.8m・深さ0.2～0.3m程度掘り込んだ部分に構築しており、胴木の周辺に栗石を詰め込んでいる。胴木材は、前列が長さ6.7m・15～20cm角、後列が長さ4m・9cm角の角材である。ともに両端を斜めに切り落として、その中央に円孔を穿ち、接ぎ手としている。胴木材の接ぎ手の円孔と両脇の要所に、杭を打ち込んで固定している。石垣前面となる部分に帯状に認められる笏谷石碎片の堆積は、根石の前面を固定す



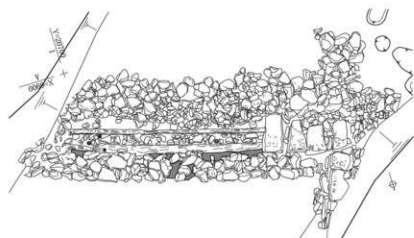
第55図 FKJ06-2平面 近世1 (S=1/200)



第56図 FKJ06-2南側 近世2・3 (S=1/200)



第57図 FKJ06-2南側 中世1・2 (S=1/300)



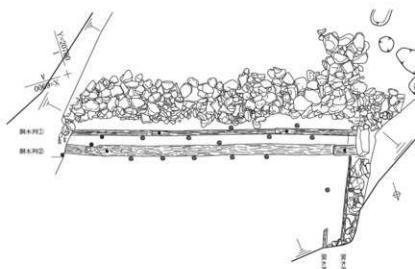
■ 南岸石垣



南岸石垣



土橋東面石垣

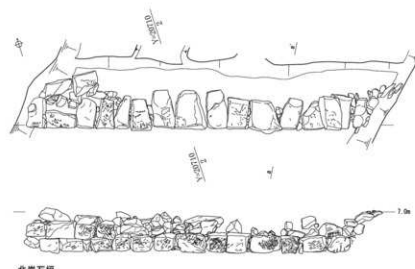


南岸石垣側面

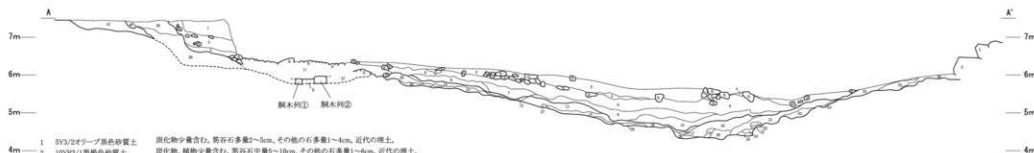
南岸石垣側面

土橋東面石垣側面

土橋東面石垣側面



北岸石垣



- 1 SY3/2オリーブ黒色粘質土 炭化物少量含む。筒石石多量2~5cm, その他の石多量3~4cm, 近代の埋土。
- 2 10Y3/1黒褐色粘質土 炭化物少量含む。筒石石多量2~4cm, 近代の埋土。
- 3 10Y3/1黒褐色粘質土 炭化物少量含む。筒石石多量2~4cm, 近代の埋土。
- 4 SY3/2オリーブ黒色粘質土 炭化物, 植物少量含む。筒石石多量6cm以下, その他の多量10cm以下, 近代の埋土。
- 5 SY3/2オリーブ黒色粘質土 植物多量含む。筒石石多量10cm以下, その他の石少量1~4cm以下, 近代の埋土。
- 6 SY3/2オリーブ黒色粘質土 植物多量含む。筒石石中量10cm以下, その他の石少量10cm以下, 近代の埋土。
- 7 SY3/2オリーブ黒色粘質土 植物中量含む。筒石石少量5~8cm, その他の石中量1~5cm, 近代の埋土。
- 8 SY3/2オリーブ黒色粘質土 植物少量含む。筒石石少量1~5cm, その他の石中量1~4cm, 近代の埋土。
- 9 2.5Y3/2黒褐色粘質土 植物少量含む。筒石石少量2~5cm, その他の石少量2~5cm, 近代の埋土。
- 10 2.5Y3/2黒褐色粘質土 植物少量含む。筒石石少量2~5cm, その他の石少量2~5cm, 近代の埋土。
- 11 10Y3/2黒褐色粘質土 炭化物少量含む。筒石石多量含む。筒石石少量2~3cm, その他の石多量3~4cm, 牛の糞/尿を多く含む。
- 12 SY3/2オリーブ黒色粘質土 牛の糞/尿を多く含む。
- 13 SY3/2オリーブ黒色粘質土 その他の石少量1~5cm。
- 14 2.5Y3/2黒褐色粘質土 炭化物, 植物少量含む。その他の石少量2~4cm。
- 15 2.5Y3/2黒褐色粘質土 炭化物, 植物少量含む。14に近。
- 16 SY3/2オリーブ黒色粘質土 炭化物, 植物少量含む。炭化物粘質土を少量含む。
- 17 2.5Y3/1黒褐色粘質土 腐葉土?

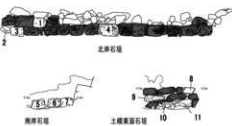
- 18 2.5Y3/2黒褐色粘質土 その他の石少量1~5cm。
- 19 SY3/1黒褐色粘質土 腐葉土粘質土を少量含む。
- 20 2.5Y3/2黒褐色粘質土 その他の石少量1~3cm, 炭褐色土をブロック状に少量含む。
- 21 2.5Y3/2黒褐色粘質土 炭化物, 植物少量含む。炭褐色粘質土ブロックを少量含む。
- 22 2.5Y3/1黒褐色粘質土 炭化物少量含む。植物少量含む。腐葉土?
- 23 2.5Y3/1黒褐色粘質土 腐葉土?
- 24 2.5Y3/2黒褐色粘質土 炭褐色粘質土ブロックを少量含む。
- 25 SY3/2オリーブ黒色粘質土 その他の石少量1~5cm。
- 26 SY3/2オリーブ黒色粘質土 腐葉土粘質土ブロックを少量含む。
- 27 2.5Y3/1黒褐色粘質土 炭褐色粘質土ブロックを少量含む。
- 28 SY3/1オリーブ黒色粘質土 炭褐色粘質土ブロックを少量含む。
- 29 SY3/2オリーブ黒色粘質土 植物中量含む。
- 30 2.5Y3/2黒褐色粘質土 炭化物, 植物少量含む。筒石石少量5~6cm, その他の石少量3~4cm。

- 31 2.5Y3/2黒褐色粘質土 牛の糞/尿を多く含む。
- 32 SY3/1オリーブ黒色粘質土 植物少量含む。炭褐色粘質土ブロックを少量含む。
- 33 2.5Y3/1黒褐色粘質土 牛糞粘質土ブロック状に多く含む。
- 34 2.5Y3/1黒褐色粘質土 植物少量含む。筒石石少量5cm, その他の石少量1~4cm, 牛の糞/尿を多く含む。炭褐色粘質土を少しに少量含む。
- 35 2.5Y3/1黒褐色粘質土 筒石石少量5~8cm, その他の石少量3~4cm, 炭褐色粘質土を少しに多く含む。
- 36 2.5Y3/2オリーブ黒色粘質土 炭褐色粘質土ブロックを多く含む。牛の糞/尿を多く含む。また炭を含む。
- 37 炭込み。筒石石の裏石
- 38 2.5Y3/1黒褐色粘質土 筒石石少量2~3cm, SY3/2オリーブ黒色粘質土ブロックを多く含む。造成立。
- 39 2.5Y3/1黒褐色粘質土 SY3/2オリーブ黒色粘質土ブロックを22%多く含む。造成立。
- 40 2.5Y3/1黒褐色粘質土 筒石石少量3~4cm, その他の石少量2~3cmを含む。37, 23%のみ。
- 41 2.5Y3/1黒褐色粘質土 その他の石少量1~5cm, 炭褐色粘質土を少しに多く含む。

第4表 FKJ06-2 石垣刻印一覧表

番号	正面	裏面	右面	左面	上面	下面
1			大			
2					大	
3					大	
4	田		田			
5					大	
6						大
7						大
8						大
9					田	
10						田
11					田	田

刻印のある石材の位置



石垣裏込

- 1 2.5Y3/1黒褐色粘質土 炭褐色粘質土ブロックを含む。
- 2 2.5Y3/1黒褐色粘質土 炭褐色粘質土ブロックを含む。
- 3 2.5Y3/1黒褐色粘質土 砂・炭褐色粘質土。



第58図 FKJ06-2南側 石垣・堀 (S=1/100)

るものであり、本来はさらに土などを被せて埋め込まれていたものと見られる。この石垣は、今回の調査で検出した石垣のなかで、最も堅固な基礎構造を備えている。これは、他の小規模な石垣が曲輪の背後に当たるとのに対し、枡形虎口を形成する表側の高石垣であったことによるものと推察される。

土橋東側の石垣は3個積まれた状態で残存する。その高さは約0.9mであり、天端で標高約7mである。石垣の前面には、崩落した笏谷石碎片・砂利などの散漫な堆積が認められる。石垣最下段の石材は、他の石垣と同様に石材が前面に突出して配されることから、根石として据えられたものと見られる。石垣基礎構造である胴木組は、遺存状態は良好ではないが、平行する2本の胴木を杭で固定するものと見られ、簡易的な枕胴木組と言える。胴木材は5～10cm四方の角材で、地山の砂層上に直接敷かれている。

いずれの石垣石材も、裏込栗石を含めてすべて笏谷石である。刻印は、石垣石材33個中11個に6種を確認した。その内訳は、北岸の石垣では19個中4個に3種、南岸の東西に延びる石垣は4個中3個に1種、土橋東側の石垣では11個中4個に4種である（第4表・第58図）。

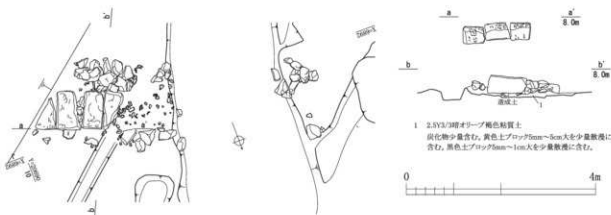
堀（第58図） 堀の調査は、他の調査区にて確認した堀と同様、限定的な範囲となった。確認した部分は土橋から東へ延長約16m分である。確認した堀の幅は南北石垣間で約14mである。最深部は標高約4.3mであり、石垣根石下端から約1.7m下がる。堀北側の砂利敷道路面は標高7.2m前後であり、堀底面との比高は約3mである。

堀の断面形は、南北石垣から緩やかに傾斜するが、堀中央やや北側に幅約2mで壁面が直立気味の落ち込みがあるため、恰も逆凸形を呈する。なお、地山である黄褐色土の下層の堆積は、砂層・シルト層・黒色粘土層の互層であり、湧水が激しい。最深部の落ち込みは、黒色粘土層を掘り込んでいる。

堀は、19世紀末の鉄道敷設に際して埋められた。福井城期の遺物がわずかであり、福井城期の堆積が最深部のみと見られることから、築城当初から廃城に到るまで整備の行き届いていたことが窺える。

枡形虎口（第55・59図） 北人分門枡形の南側障壁の痕跡を確認した。残存するのは、北面して直線的に延びる石垣と、その南側にて平行に延びる溝62024（第55・62図）である。

石垣は、石垣石材4個とその背後に詰められていたと見られる栗石が残存するのみであり、延長約6.5m分を確認した。使用される石材はいずれも笏谷石である。根石の下に胴木組はなく、笏谷石の砕石が敷かれるのみである。なお、東端の根石石材の正面に刻印（「 \square 」）がある。溝62024は、幅約0.45m・深さ0.06mであり、延長約6.5m以上を確認した。石垣と溝62024は、ほぼ平行して直線的に延びている。両者間に遺構が確認されないことから、これらが対となり枡形南側の障壁の範囲を示すものと捉えられ、それによると障壁の基底幅は約6.5mとなる。高さや上部構造については不明である。



第59図 FKJ06-2南側 枡形石垣 (S=1/80)

1) 近世 ① (第55図) 近世①における主要な遺構は、上水道関連遺構・井戸・土坑などがある。

上水道関連遺構 上水道関連遺構は、竹樋62075と溜槽62021・621124 (第60図) がある。竹樋62075は、南西-北西方向に直線的に延びる幅約0.7m・深さ約1.2mの掘り方内に、径7cmの竹管が設置されている。竹管は、掘り方底面付近に延長約6m分が辛うじて残存しており、2箇所竹管を連結した木製継ぎ手を確認した。検出した掘り方の西端から約2mの部分にて確認された円形の掘り込みは、桶などが残存しないものの、竹管の設置高なことから溜槽を設置した痕跡であると見られる。

溜槽62021・621124には、略円形の掘り方内に木製桶による溜槽が残存する。なお、溜槽621124と竹樋62075掘り方内の溜槽痕跡を結ぶ直線と、竹樋62075の延長方向が直交する位置関係にあることから、溜槽を介して連結・分岐していたことが推測される。また、竹樋62075は、4号線地点の竹樋915がその南端の溜槽908で、東へ直角に方向を変えて延びたものである (第67図)。

井戸 井戸は、62047・62086 (第61図) がある。井戸62047は、掘り方の規模が径1.05m・深さ約1.3mであり、内部に井戸枠が残存した。井戸枠を設置するだけの必要最小限の掘削を行う、いわゆる上総掘りであり、井戸枠と掘り方壁面との間は8~12cmと狭い。井戸枠は、幅約0.1mの板材を径0.55~0.6mの円形に組んで桶状にしたものであり、径7cmの穴が穿たれた底板がある。湧水は底板の穴から井戸枠内に溜まるものと見られる。井戸枠内に笊谷石、瓦、廃材、陶磁器などが投げ込まれており、井戸を廃絶するにあたりゴミを投棄したようである。遺物は19世紀代以降のものを中心とする。なお、慶応年間の絵図には、この位置に門に伴う施設と見られる表記(小屋?)がある。井戸62047と溜槽62021については、この施設に関わるものである可能性が考えられる。

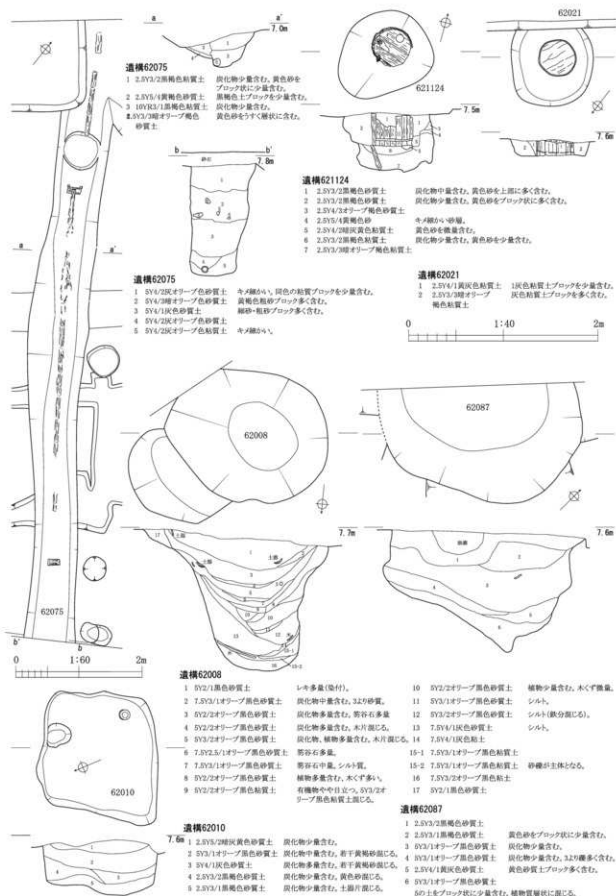
井戸62086は素掘りの井戸である。検出面において土坑62018に重複しており、16世紀の遺物を中心とすることから、福井城築城時に埋め込まれたようである。

土坑 土坑は、北人分門枡形の南側に、大小が混在して展開する。より規模の大きい土坑は、62008・62087・62010 (第60図)・62096・621129・62030 (第61図)・62023・62028・62055・62078・62083~85 (第62図) がある。このうち62087・621129などのように、埋土中に含まれる廃棄遺物の量などから、廃棄土坑(いわゆるゴミ穴)として捉えられるものもある。土坑62008は、素掘り井戸として使用したものを、廃絶時に廃棄土坑として利用したようである。

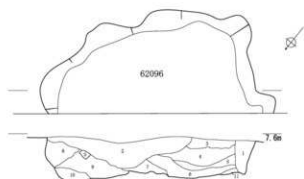
土坑62078は、4号線地点の調査で確認した遺構395と接続する同一の遺構である(第67図)。両者を合成すると、平面形は隅丸長方形となり、規模は長軸5m以上・短軸2m以上・深さ0.6m前後である。北人分門枡形内に位置する17世紀代の遺構であることから、枡形構築に関わることが考えられる。

土坑62030は、この調査区において最大規模の土坑である。径3.8m以上であり、深さは検出面から3m近くまで確認したが、安全のため完掘し得ず、底面は確認できていない。平面形は略円形で、壁面は直線的に立ち上がる。覆土はブロック土主体で、一度に埋め戻しを行ったようである。埋土中には多種多様の遺物が含まれており、遺物の時期は17世紀後半を中心とする。周辺の井戸がこれよりも浅い掘削深度であるため井戸とするには疑問が残るものの、断面形からは井戸枠などを伴った井戸と捉えることが妥当であり、北人分門設置などの縄張・街区の再整備に伴い廃絶したものと考えられる。

これらの他に、多数の柱状穴の土坑がある。柱痕が確認され、柱穴として捉えられる例もあるが、建物などを想定し得るものはなかった。



第60図 FKJ06-2南側 遺構① (S=1/40・62075平面図のみS=1/60)

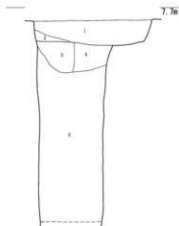
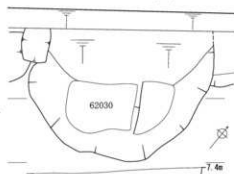
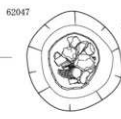
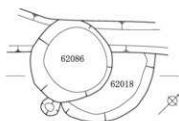
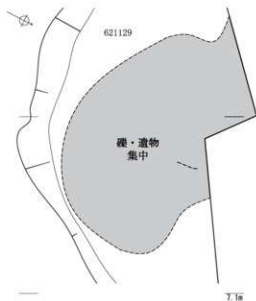


遺構62096

- | | | |
|----|----------------|------------------------------|
| 1 | SV2/1黒色粘質土 | 粘結力。 |
| 2 | SV4/2灰オリーブ色砂質土 | 同色の粘質土をブロック状に少量含む。 |
| 3 | SV2/24リブ黒色粘質土 | 炭化物少量含む。 |
| 4 | SV2/24リブ黒色砂質土 | 炭化物少量含む。7.SV3/1粘質ブロックを含む。 |
| 5 | SV3/24リブ黒色粘質土 | 4.27明い。 |
| 6 | SV3/24リブ黒色砂質土 | 7.SV4/2灰オリーブ粘質ブロックを多く含む。 |
| 7 | SV4/2灰オリーブ色粘質土 | 6を層状に含む。 |
| 8 | SV4/3緑オリーブ色粘質土 | |
| 9 | 2.SV3/1黒褐色砂質土 | 炭化物少量含む。炭屑石少量。砂・炭化物のうすい層が散在。 |
| 10 | SV2/24リブ黒色砂質土 | |
| 11 | SV3/24リブ黒色粘質土 | SV4/2緑オリーブ砂質土をブロック状に少量含む。 |

遺構621129

- | | | |
|---|---------------|-------------|
| 1 | 2.SV3/9黄褐色砂質土 | 炭化物少量含む。 |
| 2 | 2.SV2/2黒褐色粘質土 | 炭化物、焼土少量含む。 |
| 3 | 2.SV3/1黒褐色粘質土 | 炭化物、焼物少量含む。 |



遺構62018-62086

- | | | |
|---|---------------|---------------------------------------|
| 1 | 2.SV4/1黄褐色粘質土 | 炭化物、焼土少量含む。鉄分までに中量散在。 |
| 2 | SV4/1灰色粘土 | 炭化物少量含む。 |
| 3 | SV3/1オリーブ黒色粘土 | 炭化物少量含む。腐った木跡。 |
| 4 | 10V9/1褐色色粘土 | 炭化物、焼土少量含む。腐った木少量含む。 |
| 5 | 2.SV3/1黒褐色粘質土 | 炭化物少量含む。黄褐色砂質土をブロック状に多く含む。埋の戻しの様子を呈す。 |

遺構62030

- | | | |
|---|----------------|--|
| 1 | SV3/3灰オリーブ色粘質土 | 全体がブロックでまだら状を呈している。SV3/3灰オリーブ・2.SV4/1黄灰・2.SV5/1黄灰・7.SV2/1黒などの砂質ブロック・粘質ブロック・砂ブロックを大～小さまざまな規模で含む。炭屑石が最大～人頭丈まである。 |
|---|----------------|--|

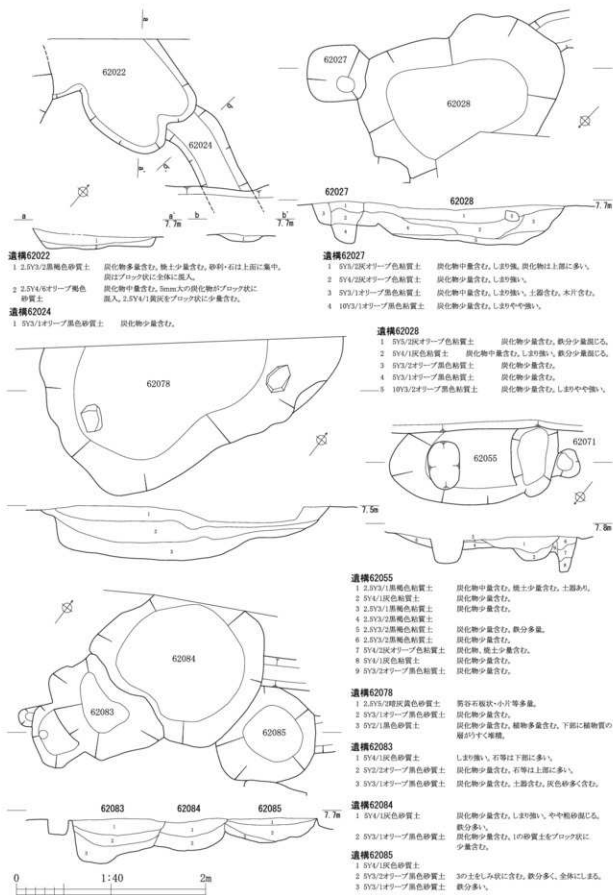
遺構62047

- | | | |
|-----|---------------|--------------------|
| 1 | SV2/24リブ黒色粘質土 | 砂質シルト、黄3C9(SV6/8)。 |
| 1-1 | SV2/24リブ黒色粘質土 | |
| 2 | 2.SV3/2黒褐色粘質土 | |



第61図 FKJ06-2南側 遺構② (S=1/40・62030のみS=1/80)

第4節 FKJ06-2南側地区の調査



第62図 FKJ06-2南側 遺構③ (S=1/40)

2) 近世 ② (第56図) 近世②における主要な遺構は、井戸・土坑などである。

井戸 井戸は、621106・621113(第63図)がある。井戸621106は、石組井戸である。掘り方は、径1.2m前後・検出面からの深さ1.27mであり、石を積み上げるだけの空間しか確保していない。石組は、内径約0.6m、高さ約0.7mが残存する。使用される石材は、笏谷石や川原石など種々雑多であり、破損した石臼2点も含む。石組の基礎構造は、径5cm程度の棒材を井桁状に組み合わせたものである。円形の石組であるが、井桁状の基礎に沿って組まれたため、石組下方の平面形は方形に近い。17世紀初頭を中心とする時期の遺物が含まれることから、北人分門設置以前の屋敷地に伴う井戸と捉えられる。

井戸621113は、平面形が円形の素掘り井戸である。規模は径1.8m前後であるが、深さは安全のため約2.5mまでしか掘削しなかった。覆土は短時間で埋め戻された様相であり、断面形状や掘削深度も井戸62030と同様な状況である。

土坑 土坑は、621105・621108・621109(図64)・621110・621115(図63)がある。このうち621105は、埋土中に含まれる廃棄遺物の量などから廃棄土坑と捉えられる。

廃棄土坑621105は、平面形が不整形円形を呈し、規模が径1.7m前後・深さ1.45mである。南北壁面はやや丸みを帯びる底面から一定の傾斜で立ち上がっており、北面についてはオーバーハングの状況となる。埋土中には、人為的に投げ込まれて堆積したかのような中央の盛り上がる層が確認される。底面付近から17世紀後半の瓦が出土しており、北人分門設置後に機能したことが窺える。

これらの他に柱穴状の土坑を確認した。礎石・柱痕が残存して、柱穴と捉えられる例もあるが、建物などを想定し得るものはなかった。なお、柱穴621118には、礎石と見られる石が掘えられている。

3) 近世 ③ (第56図) 近世③の遺構は、溝2条、土坑1基である。

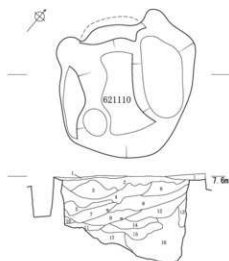
溝 溝は、621135・621136(第65図)がある。溝621135は、南側が調査区外へ延びるが検出長9.9mであり、最大幅1.15m・深さ0.33mである。断面形は、平坦な底面から外方に壁が立ち上がる、扁平な逆台形状を呈す。溝621136は、北側が削平されており検出長6.3mであり、最大幅0.47m・深さ0.43mである。断面形は直立気味に立ち上がる壁をもつ箱状を呈す。これら2条の溝は、平行して直線的に南南西-北北東方向に延びており、桁形の痕跡とはほぼ直角に交差して重複する。また、埋土中に含まれる遺物の時期は、ともに17世紀初頭を中心とする。そのため、北人分門設置以前の遺構であることは明らかであり、その状況から前段階の道路を示すものと見られる。捉えられる道路幅は約4.4mである。

土坑 土坑621138は、東側は現代のカクランにより削られており規模は定かではないが、残存長1.66m・深さ0.48mである。平面形は歪な長方形である。17世紀初頭の溝621136に切られていることから、さらに前段階の遺構と見られるが、遺物が確認されなかったため時期は不明である。

2 福井城築城以前(第57図)

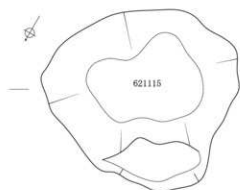
福井城築城以前の遺構は、築城段階の造成土を除去して確認した遺構(中世①)・明黄褐色土の明確な地山以上に最終的に確認した遺構(中世②)である。中世①・②として説明するが、中世②は造成土・黒褐色土を掘削して明確な地山まで削平して確認したものであり、必ずしも遺構の構築面を確認し得ていない。そのため、重複関係などの時期的な判断に誤認のある可能性は否めない。また、古代に遡る遺構も重複して確認したが、遺構面として捉えたものでないことから、中世②段階と合わせて報告する。

1) 中世 ① 中世①の段階には、後に堀として再整備される部分を中心に、湿地が広がっていたようである。後世の擾乱などのため流路が不明瞭ではあるが、自然河川と見られる落ち込みも確認され



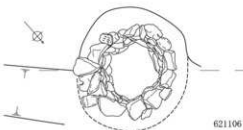
遺構621110

- 1 2.5V4/2暗灰黄色砂質土 炭化物少量含む、黄色砂をしみ状に少量含む、よくまわっている。
- 2 2.5V3/2黒褐色粘質土 炭化物少量含む、灰黄砂をしみ状にやや多く含む。
- 3 2.5V5/6黄褐色粘質土 炭化物少量含む、2.5V6/2ブロック状に少量含む。
- 4 2.5V5/6黄褐色粘質土 炭化物少量含む、2.5V6/2ブロックが多く混入し、まだら状を呈す。
- 5 2.5V3/2黒褐色粘質土 炭化物少量含む、3ヶ所一帯のみが、2.5V3/2が主体となる。
- 6 5V3/2オリーブ黒色粘質土 炭化物少量含む、30cm以上5mm以下ワロウク状に部分的に少量混入。
- 7 2.5V3/2黒褐色粘質土 炭化物少量含む、2.5V3/6がブロック状に微量混入。
- 8 7.5V2/2オリーブ黒色粘質土 炭化物少量含む、5V4/3ワロウクをしみ状に多く含む。
- 9 5V3/2オリーブ黒色粘質土 炭化物少量含む、同色の砂質土との混入。遺物(土師瓦片)含む。
- 10 5V3/2オリーブ黒色粘質土 炭化物少量含む、2.5V6/2灰黄砂を微量含む。
- 11 5V2/2オリーブ黒色粘質土 炭化物少量含む、5V4/3ワロウクをしみ状に少量含む。
- 12 7.5V2/2オリーブ黒色粘質土 炭化物少量含む、5V4/3ワロウクを微量含む。
- 13 2.5V3/2黒褐色粘質土 炭化物少量含む、2.5V6/2灰黄砂を微量含む。
- 14 5V3/2オリーブ黒色粘質土 炭化物少量含む、5V4/3ワロウクを微量含む。
- 15 5V2/1黒色粘質土 炭化物少量含む、5V4/3ワロウクを微量含む。
- 16 5V4/3ワロウク褐色粘質土 炭化物少量含む、2.5V3/2黒褐色粘質土をしみ状に微量含む。
- 17 5V2/1黒色粘質土 2.5V5/6黄褐色粘質土を層状にやや多く含む。

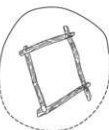


遺構621115

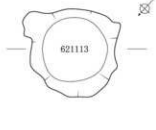
- 1 2.5V4/3オリーブ褐色粘質土 炭化物少量含む、黄褐色砂をしみ状に多く含む。
- 2 2.5V6/4にぶい黄色砂質土 炭化物少量含む、キムの粗い黄色砂を少量含む。
- 3 2.5V6/4にぶい黄色砂質土 31に混入する黄色砂は認められない。
- 4 2.5V4/3オリーブ褐色粘質土 炭化物少量含む、鉄分多く全体に赤味を帯びる。
- 5 2.5V4/2暗灰黄色粘質土 黄色砂・灰色砂をしみ状に少量含む。
- 6 2.5V4/2暗灰黄色粘質土 炭化物少量含む、黄褐色を少量含む。
- 7 2.5V4/3オリーブ褐色粘質土 炭化物少量含む、鉄分多く全体に赤味を帯びる。
- 8 2.5V4/3オリーブ褐色粘質土 炭化物、粘土少量含む、黄褐色土ブロックを多く含む部分的にまだら状を呈す。
- 9 2.5V3/2黒褐色粘質土
- 10 2.5V3/2黒褐色粘質土



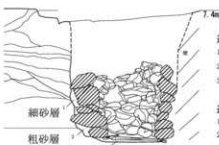
621106



井戸底基礎部



621113



遺構621106

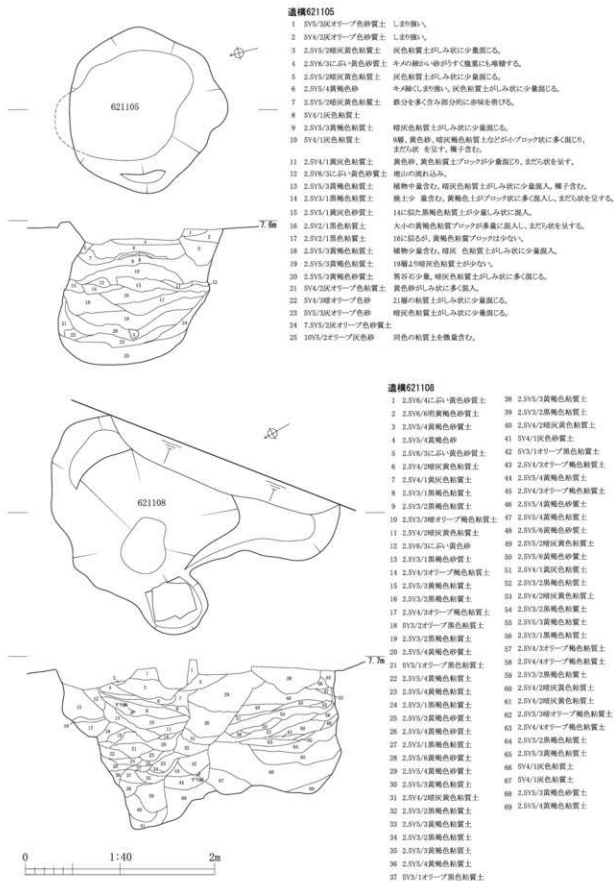
- 1 2.5V4/3オリーブ褐色粘質土 黄褐色粘質土小ブロックやや多く含む。
- 2 5V4/2泥オリーブ色砂 黄褐色粘土ブロックを多く含む。
- 3 7.5V3/1オリーブ黒色粘質土 オリーブ黒色の粘土ブロック状に少量含む。

遺構621113

- 1 2.5V6/2灰黄色砂質土 黄色砂ブロックを少量含む、かたつきする。
- 2 5V6/3泥オリーブ色粘質土 黄色砂・黒褐色土ブロックを多量含む、まだら状を呈す。
- 3 2.5V5/4黄褐色粘質土 黄色砂・灰色粘質土ブロックを多量含む。
- 4 N4/00灰色粘質土 ややキムの粗い砂をブロック状に多く含む、主軸となる粘質土もブロック大の。



第63図 FKJ06-2南側 遺構④ (S=1/40・621113のみS=1/80)



第64図 FJ06-2南側 遺構⑤ (S=1/40)

る。遺構は溝62057・62076（第65図）がある。

溝62076は、幅0.92m・底部幅0.1m前後・深さ1mのV字形の断面を呈する。溝62057と並行し、北東-南西方向に延びる。北側は自然河川と見られる落ち込みに至り消滅する。埋土最下層は砂質土の堆積であり、一時的かもしれないが水の流れがあったことが窺える。

これらの埋土および覆土は福井城築城時の造成土と同様であり、造成に際して溝・河川もろとも埋め込んだものと判断される。なお、もともと湿地であったことが、一旦は屋敷地と整備されたものの、新たに堀を開削する際にこの地が選ばれた理由の一つではないかと思われる。

2) 中世 ② 中世②の遺構は、土坑・溝などがある。また、中世①段階のものとは異なる北東-南西方向に延びる自然河川を確認した。北岸を確認したのみであるが、その深さなどから比較的大規模な流路と捉えられ、福井城百間堀の前身である吉野川の一支流であったことが推測される。

土坑 土坑は622003・622005・622006（第65図）がある。いずれからも16世紀の遺物を確認した。

土坑622006は、長軸1.46m・短軸0.93m・検出面からの深さ0.55mである。平面形は隅丸方形で、断面形は箱形を呈する。土坑底面からは板材が交互に折り重なった状態で出土した。板材の中には樹皮で綴じられた、何らかの転用材と見られるものも確認される。

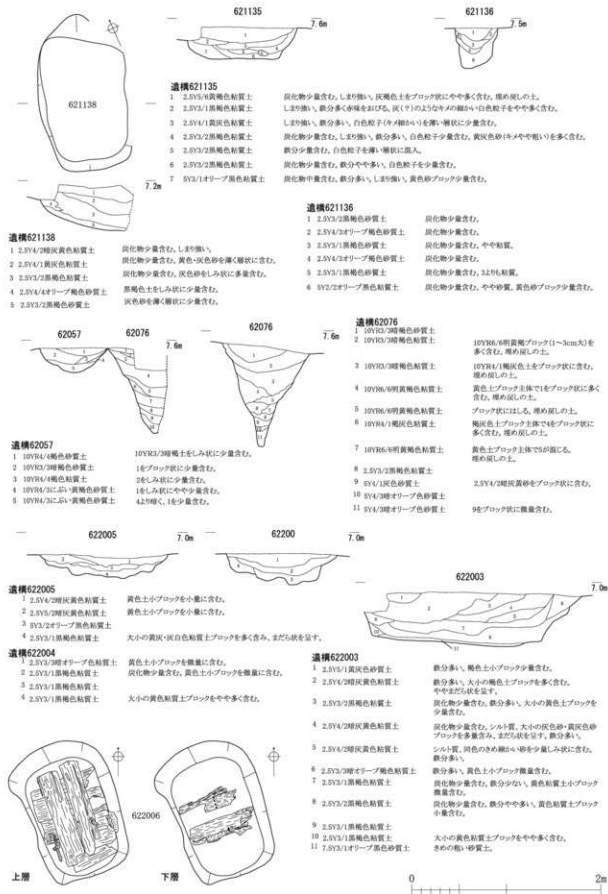
溝 溝622004（第65図）は、検出長11.3m・幅1.5m・深さ0.32mで、緩やかに湾曲しつつ北東-南西方向に延びる。埋土中に含まれる遺物は、9世紀初頭と見られる須恵器・土師器を中心とする。

絵図による北人分門は、広義の内枿形虎口であるが、門が正面の構えのみに設置されるため、いわゆる食い違い虎口とは様相が異なる。門は、絵図などの表記から高麗門形式と捉えられる。北人分門は、万治2（1659）年頃以降の福井城下の絵図に継続して確認することができるが、慶長18（1613）年頃を示す「北之庄城郭図（北庄家中図）」には表記されていない（巻首図版1・第3図）。そのため、北人分門の設置などの縄張改変は、17世紀第2四半期頃と目することができる。

築城当初、東三ノ丸から堀を挟んで南東に、4軒の屋敷地が南北方向に並んでいた（巻首図版1・第3図）。しかし縄張改変により、北端の屋敷地の大半が堀となり、その残る部分も南の屋敷地に統合されたため、南北に並ぶ屋敷地は3軒となった（第4～10図・巻首図版2）。調査で確認した屋敷地は、3軒のうち北端（築城当初は4軒のうち北から2軒目）の屋敷地に当たる。なお、この街区は、大阪の陣に際しての部隊編成が行われた場所に当たるとされ、「（元）割場」と呼ばれるようになる。

屋敷地内の遺構は、井戸や廃棄土坑などの大型土坑の他、竹樋などの上水道関連遺構を確認したが、建物構成する柱穴や礎石は確認されず、屋敷地内の構造や建物配置などは不明である。ただし、調査区内にて井戸や廃棄土坑が認められた事実から、調査区以外の部分に建物が配置され展開した可能性はある。また、絵図などによると、62009・62089・62091・621121などの南北に並ぶ柱穴状遺構は、この屋敷地東側を区画した設備の痕跡の可能性が考えられる（第55・67図）。さらに、この柱穴列と、縄張改変以前の下層道路西側の溝621136は、ほぼ一直線上に延びていることから（第56図）、縄張改変の前後で屋敷地東側区画の位置が大きくは変更されなかったことが窺える。

近世以前の様相については、絵図などが残存せず詳細は不明である。確認された状況から、自然河川の移動が捉えられるが、その合間を縫うように遺構が構築されており、自然の弊害を受けつつも継続する人々の営みが窺える。自然河川は、北東-南西方向の流路が移動して埋没した後に、再び北西-南東方向の流路として現れる。その後、福井城築城時の造成で埋め込まれ姿を消す。



第65図 FKJ06-2南側 遺構⑥ (S=1/40)



第67図 北人分門の周辺遺構図 (FKJ06-2地区と4号線地点 S=1/400)

第5節 FKJ06-2北側・3地区の調査

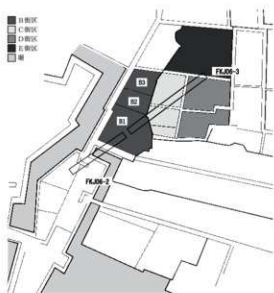
FKJ06-2北側・3地区の概要 調査区設定上、FKJ06-2地区とFKJ06-3地区とは分かれているが、FKJ06-2地区の堀より北側とFKJ06-3地区南側の武家屋敷は同一であるため、一括して扱う。

福井城下絵図によると、この地区は城の東側、百間堀より北に位置し、江戸時代を通じ武家屋敷街であった。慶長期から幕末の絵図を見比べると、街区に大きな変化はないが、各街区内の屋敷地割りは時期により分割・併合し変化する。また近世福井城期の他、古墳時代から中世まで断続的に続く複合遺跡でもある。古代以前は別に譲り、ここでは中世以降の遺構について扱う。

主要な遺構は、街区関連では道路・屋敷境溝がある。

武家屋敷内施設では井戸・土坑・外構関係（塀・門）・庭池・上水道施設などがある。なお、中世も含め第68図の街区区分に従い、図示した遺構を中心に略述する。

※近世の街区観念は、道路両側の屋敷群を以て1つの街区(町)と見做すもので、福井城下でも準じていた。しかし、調査では認識し易い道路遺構を街区の境界とし、道路に囲まれた部分を「街区」と称する。従って近世福井城の街区区分・観念とは相違する。



第68図 FKJ06-2・3街区割図 (S=1/5000)

1 B街区

古墳時代から古代・中世・近世福井城期まで確認されている。B街区東側には自然河川が南に流れ、福井城期には屋敷境となる。B街区から西は微高地で環境に適し、古代より遺跡が集中する。

1) 中世 主な遺構は柱穴・土坑・井戸等である。柱穴類は北側 (FKJ06-3区) に、井戸・大型土坑類は南側 (FKJ06-2区) に集中し、空間区分が明確である。遺構の時期は出土遺物から中世後期 (16世紀後半) と考えられる。なお、隣接する4号線地点では中世前期 (13世紀) の遺構・遺物は確認されていない。

井戸 石積1基の他は総て素掘である。62502は大ぶりな笏谷石を積んだ石積井戸である。積み石は最大8段・深さ1.5m残るが確認面から下0.4mまで石材は抜き取られる。底部は石積み基底部より約0.3m掘り下げる。遺物がなく時期を明確にできないが、築造場所や構造から福井城期より古いと考えられる。62550・62608・62621・62637はいずれも平面形が正円に近く、壁面がほぼ垂直であるため井戸とした。いずれも口径0.8~0.9mで井戸遺構によく見られる径だが、62621のみ直径1.5mと大きく、土坑の可能性もある。この他素掘井戸は10基検出されたがいずれもFKJ06-2区に集中する。

土坑 井戸に比べ少ない。62601は直径1.6mを測る。正円に近い平面形で壁は垂直で中程に段を有する。底部には2基の柱穴を穿つ。攪乱とも考えたが、断面観察では土坑埋土より下となる。

柱列 攪乱や調査区の狭さから建物か塀かは判じられないため、柱列として纏めておく。柱列B-3は南北方向に伸び、柱間は1.8m、掘方径約0.6m。柱列内で底に礎石を据えたものといものがある。63502は柱根を残し、柱径は0.2m前後である。63038掘立柱穴底に礎石を据える。断面から柱は抜き取られたと考えられる。B4は東西方向に伸び柱間は2.2m、掘方径約0.3~0.4mと小さい。

2) **福井城期** 近代の鉄道工事等で江戸時代後半の遺構面は削平され、確認された遺構は17世紀代のみである。絵図によると17世紀初期(第3図 慶長図)には広大な屋敷地B1とB3に分かれる。以降B3の区割りは幕末まで変わらない。17世紀中頃(第5図 寛文大火前図)B1の北側1/4が分割されB2となる。が18世紀以降(第8図 正徳図)再びB1に合併される。今回の調査対象はB1のみである。

主な遺構は、街区関連では道路・屋敷境溝がある。武家屋敷施設では井戸・土坑・塀・庭池・上水道施設などである。なお、礎石建物遺構は検出されなかった。

砂利敷道路 道3はFKJ06-2区の堀北岸を通る東西路で幅員約8mを測る。路面は玉砂利を敷き詰め舗装する。舗装面は2面確認されたが、攪乱・削平が激しく遺存状況は悪い。路盤は造成せず、古代包含層・地山層を掘り下げ、地山粘土に玉砂利を直播し叩き締める。

塀 柱列B1は屋敷内の玄関へのアプローチと表庭部分を仕切る塀の柱穴と思われる。柱間は4間。間隔は2.0mと1.4mがある。塀の一部には溜り戸や中門が付くため、間隔の違う部分はこれに相当するか。なお、石列B2は塀の延長上にあり、塀際のアシらいと考えられる。

土坑 FKJ06-2北側地区は屋敷の「オモテ」に当たるため殆ど検出されなかった。屋敷裏側に当たるFKJ06-3地区では63044・63084を確認した。63044は平面形が径2.5mのほぼ正円で、井戸堀方の径に近い。井筒痕跡は確認できなかったが、本来井戸として作られ、廃絶時に井戸側(石・桶)を抜き取りゴミで充填した可能性もある。

園池 4号線地点で検出した園池の東半分に当たる。今回の調査では園池への導水部分および池の石積護岸を確認した。調査過程から図面上大きく4期に分類したが、部分改修は度々行われたと思われる。

1期 下水路(62511下)は排水用暗渠で、池から東へ3m延び、約90°南へ振る。その先は道3を横切り堀へ排水したと思われる。水路底部の標高は池側で6.89m、調査区境で6.78mを測る。導水路本体は笏谷石製の樋(U字溝)を使用する。排水路の最初の樋は開渠式で、水量調節用の堰板をはめる溝がある(第173図8)。蓋石は整形品の他、割れた板石や平らな割石等流用品が多いのは、人目に触れない暗渠の故であろう。池側の蓋石は、樋の規格に合わせた全長0.7mの長い板石である。人目に触れる水門の蓋は平瓦当状の反りが付く。石積護岸は、石を据える部分を掘り下げ、笏谷石の石材を2～3段積む。池床面は玉砂利を敷く。排水用暗渠付近のみ床面が下がり、排水口周りに溜まりをつくる。

2期 排水用下水路(62511下)を給水用に改めるため、直上に上導水路(62511上)を整備した。導水路床面高は池側が標高7.08m、調査区端で7.15mと比高差が逆転する。約90°曲がる下水路を南東から一直線に改め、上導水路の底石(床面)は下水路蓋石上面をそのまま利用した。下水路から外れる部分は掘削面をそのまま床面とした。側石は素割石や割れた板石を使用し、蓋石も同様の石材を用いる。水門は下水路の水門とほぼ同じ位置であり、1.2mは開渠となる。池北岸は1期から変化しないが、南岸は幅1m強埋められ、汀には笏谷石が乱雑に並べられ、調査区端では0.7m以上の大石が据えられる。大石は調査区外へと続き、池の見せ場となる石組が設けられていたと思われる。床面には玉砂利を敷く。

3期 上導水路がそのまま機能するが、2期の吐水口前の開渠部に蓋石を掛けて暗渠部を延長し、池に接して吐水口を設ける。延長された暗渠部の蓋石は0.8×0.5mと大型で石材規格が2期と大きく相違する。池内は2期と大差ないが、さらに玉砂利が嵩上げされ浅くなる。

4期 上導水路は吐水口より池床面の玉砂利敷きが高くなり、機能を失い廃絶する。4期の給水に関わる遺構は確認されなかった。上導水路の上に広がる中・小の笏谷石は景石等の根石に当たるのか、最上層の導水に関わるものか、上部が近現代に削平され不明である。

自然河川（一屋敷境溝） 北から南へ流れる自然河川だが、福井城期には屋敷境とされる。自然の川岸を埋め立てて狭め、底も急速に埋没し浅くなり、江戸時代後期には岸を石積とした。ただし、単純に埋没・埋め立て整備が行われたのではなく、何度も浚渫・掘り直しが行われたと思われる、平面のみならず断面でも川63520の変遷過程を追うのは難しい。遺構63090は護岸石列である。石積は最下段一列のみ残る。石積の崩落を防ぐため縦杭を打つ。石材は場所により大・小様々あり一定しない。南側の護岸石材は非常に小振りであり、積み方も乱雑で上に石を積むことが難しいように見受けられる。北側では大木を横に寝かせ、石積の代わりとする。63090に対する石列が東岸と考えられるが、石は積まれておらず乱雑に集められた状態である。63514も小振りな石を並べ、縦杭を打ち横木を通して護岸する。様相は63090に類似する。対になる石列は確認されなかった。63527は基底部に剛木を敷き、素割りした石を並べ、部分的に2段残る。石材は小口を正面とし、奥が細くなる平面台形で近代的様相を呈する。なお、63520に関わる土層や4号線地点との関連は、第2章第2節を併せて参照されたい。

2 C・D街区

FKJ06-3調査区の北半にあたる。各時期の絵図によると17世紀初期頃（第3図 慶長図）は低湿地で未開発地区であったようである。島原の乱での功臣を付近に住ませ、「天草町」が作られた。17世紀半ば（第4図 万治図）から後期（第7図 貞享大法まで）まで付近一帯が「杉田主水与力」の屋敷で占められる。ただし、与力屋敷の詳細の地割りは絵図には記されていない。その後大きく変化し、18世紀（第8図 正徳図）では屋敷地が細分され東西路（道5）が追加されるが19世紀（第9図 文化図）にはいくつかの屋敷が合併して広くなり、不要となった東西路（道5）は廃され再び屋敷地の一部となる。

検出された主な遺構は、街区関連では道路および側溝・屋敷境溝がある。武家屋敷施設では井戸・土坑・堀・庭池・上水道施設などがある。なお、礎石建物遺構は検出されなかった。

砂利敷道路 2条確認された。道2は幅員4.5m（19世紀時点）、玉砂利を敷き舗装する。この道は頻繁に改良がおこなわれ、付随する側溝も改築を繰り返す。玉砂利敷きは3面確認されたが部分的補修もおこなわれ、正確な改良面数は不明である。側溝は、17世紀前期は道路北側の63233のみで、東部分で土橋を掘り残す。17世紀後半頃には63233は埋め立てられ、代わって道路南側に63168が掘削される。幅約2mを測り、葉研掘りとする。18～19世紀は63168が埋め立てられ従来の側溝はなくなり、道幅が広がった。側溝に代わりさらに北側に石積みの溝が掘削された。ただし度々作り直され、改良毎の流路復元は困難である。

道4はさらに複雑である。17世紀代の遺構面では側溝は確認されるが、玉砂利敷舗装が全く残らないことから、絵図記載の道路ではあまりみられない非舗装の可能性がある。道4の砂利敷き路面63011（道4）は、溝63134を埋め立て整備される。63011の路面が西側溝63006に重ならないことから、63011と63006は併存したと考えられる。時期は溝63134と道路路面63007（道4新）との間、18～19世紀頃であろう。幕末から明治期に西側溝63006を埋め、道4の西側に63007（道4新）を移設した。道路東側には小石を並べ路肩をつくり、溝63028を西側溝とした。なお、正徳図（第8図）に見える道5の明確な遺構は確認されなかった。ただ、後述する園池63064背後の平坦部分が道5であったと考えられる。

溝 63185・63808・63183は総てC街区の方に比べ若干北東に振る。隣接する4号線地点でも同方位で直角に曲がる溝（FKJ96-2遺構44）が検出されており一連であろう。2条が並行することから道路側溝と考えられる。なお、63185と63808の間、63901の溝が途切れる部分は土橋と考えられる。但し、門・

塚にあたる柱穴は確認されなかった。一連の遺構を道路とした場合、「絵図」には全く現れないことから福井城以前の街区の可能性が指摘される。ただし、C街区では17世紀以前の遺物は確認されておらず、遺構の性格・帰属時期など検討の余地がある。

道4に関わる側溝は4条みられる。うち63006のみ西側側溝で残り3条は東側側溝で約1m間隔に並行する。いずれも北側の同じ場所を掘り残すため、その位置が屋敷への入口(土橋)であったと考えられる。ただし、①土橋として掘り残した部分に廃棄土坑が集中すること。②溝と土坑とが全く切り合わないことから併存していたとすれば出入口ではない可能性もある。東側溝3条は切り合わないため新旧関係が不明だが、63106・63107は最下面で確認された。63134は63106等より上面で確認されている。また、63008は開削時期が不明ながら19世紀まで存続するが、幕末～明治頃には埋め立てられる。

門 D1は3本柱(柱間0.7m)、掘立柱である。柱穴63155および63203に幅0.12mの角柱が残る。

柱列 掘立柱列C1は柱間1.6m、北側はこれ以上延びない。C1周辺に集中する柱穴は、建て替えられた塀とおもわれるが、2間以上復元できるものはなかった。同様に池63064から道4の間には柱穴が散在する。一定の方向性は認められるが、等間隔に2間以上復元できるものはない。

土坑 道2と道3に挟まれた部分(D街区)および道3西側(C街区)に集中する。D屋敷の土坑は、何重にも切り合い、遺物量も少ないことから日常ゴミの廃棄土坑と考えられる。出土品から17世紀中～後期と考えられる。C屋敷の土坑は道3新に並行して掘削される。木屑(製材屑?63024)や木根(63022)が大量に出土している。遺物から19世紀とみられる。

圍池 63064は調査区南東から取水し、北西方向へ流れる。北岸が圍池の手前と考えられ、川原石を敷き詰め州浜をつくる。州浜の川原石の抜けた部分は礎石もしくは飛石の抜き取り痕と考えられる。遺構面から0.2m程度掘り込み、護岸に一辺0.2mの素割り石を1～2段乱雑に積む。護岸の石または板を止めた木杭も残存する。南岸は乱雑ながら大振りな石が多く、背景の築山や立石であったと考えられる。池床面には0.1m前後の川原石を敷くが、取水口付近は直径0.2m前後の大振りなものを使用する。圍池62526と比べ、改修の痕跡が少ないことから遺構存続時期は短いと考えられる。圍池廃絶時の埋め立て土内から焼土とともに17世紀後半の遺物が出土しており、下限は寛文の大火頃と想定される。

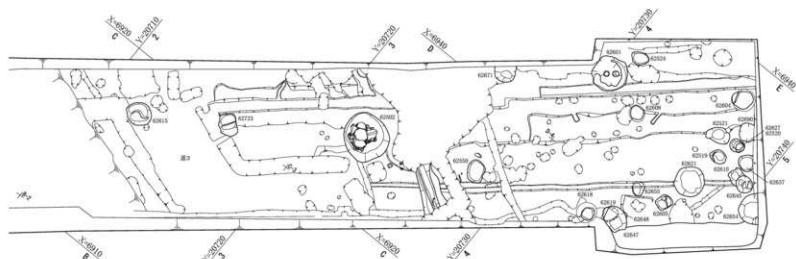
3 E街区

調査区北端、道2の北側にあたる。調査範囲は狭い。主な遺構は溝、柱穴、土坑などである。

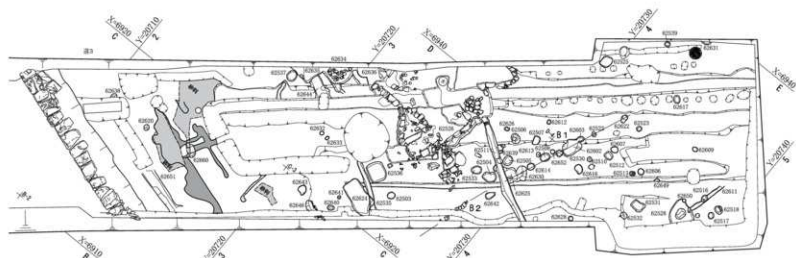
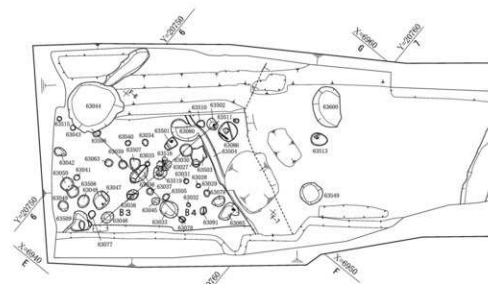
溝 63002Aは、道2から約2m屋敷地内に入り、道に並行し流れる。溝兩岸は割石や転用材を使用し粗く積む。石積前面に木杭を乱立させ止める。石積裏には笏谷石礫が裏込込に大量に入る。北岸部分は高0.3m程度石を積み、その石積から0.5m離し一部に桐木を敷いて石を積んでおり、擁壇状となる。なお、南岸では幅0.5mの板護岸溝63002Cが部分的に確認された。石積溝を造る際に破壊されたものと考えられる。19世紀中頃廃絶か。

門 E1は3本柱(柱間0.8m)、掘立柱で底に礎石を置く。通常の塀の掘立柱穴に比べ礎石を掘え丁家に作る。柱穴の1つ63257は3回の立て替えが確認されたが、最も新しいものをE4の柱穴とした。

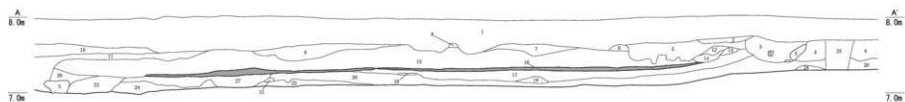
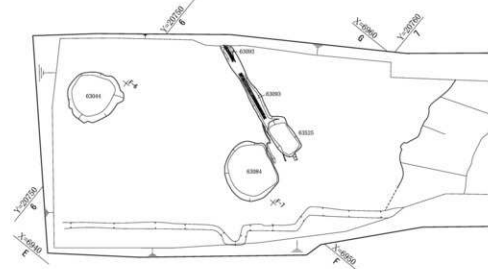
柱列 3列確認された。柱列E2・E3は2間分のみ確認された。柱間1.6m、柱列E2・E3とも類似する位置に立つことから建て替えと考えられる。柱列E4は、柱列E2と列が揃うが、柱間が2.0mでE2より広い。柱列E2とE4の間は約3.8m開くが、通路部分の可能性もある。E5は1間分のみで、柱間は2.4mと広い。柱穴の直径は0.3mと小さい。



16世紀末～17世紀初頭



17世紀中葉以降



埋構状況A (遺跡)

- 1 1670年築成土
- 2 1670年築成土
- 3 1670年築成土
- 4 1670年築成土
- 5 1670年築成土
- 6 1670年築成土
- 7 1670年築成土
- 8 1670年築成土
- 9 1670年築成土
- 10 1670年築成土

1670年築成土、その後の少量存在、中程度。
 同様に、築成土、その後の少量存在、中程度。
 同様に、築成土、その後の少量存在、中程度。
 同様に、築成土、その後の少量存在、中程度。
 同様に、築成土、その後の少量存在、中程度。
 同様に、築成土、その後の少量存在、中程度。
 同様に、築成土、その後の少量存在、中程度。
 同様に、築成土、その後の少量存在、中程度。
 同様に、築成土、その後の少量存在、中程度。
 同様に、築成土、その後の少量存在、中程度。

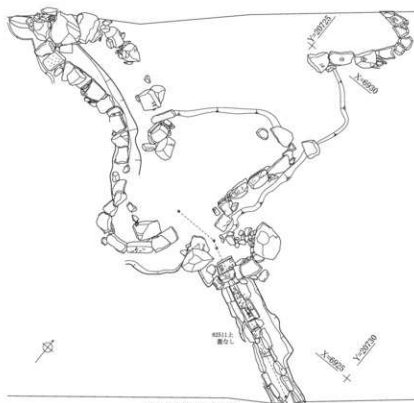
- 11 1670年築成土
- 12 1670年築成土
- 13 1670年築成土
- 14 1670年築成土
- 15 1670年築成土
- 16 1670年築成土
- 17 1670年築成土
- 18 1670年築成土
- 19 1670年築成土
- 20 1670年築成土

同様に、築成土、その後の少量存在、中程度。
 同様に、築成土、その後の少量存在、中程度。
 同様に、築成土、その後の少量存在、中程度。
 同様に、築成土、その後の少量存在、中程度。
 同様に、築成土、その後の少量存在、中程度。
 同様に、築成土、その後の少量存在、中程度。
 同様に、築成土、その後の少量存在、中程度。
 同様に、築成土、その後の少量存在、中程度。
 同様に、築成土、その後の少量存在、中程度。
 同様に、築成土、その後の少量存在、中程度。

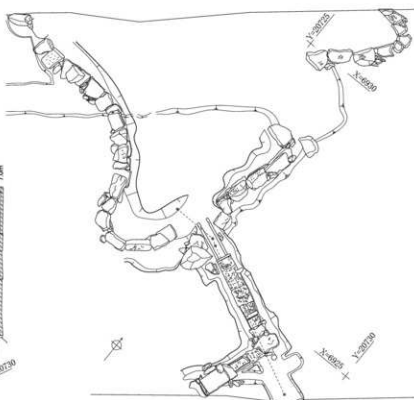
- 21 1670年築成土
- 22 1670年築成土
- 23 1670年築成土
- 24 1670年築成土
- 25 1670年築成土
- 26 1670年築成土
- 27 1670年築成土

同様に、築成土、その後の少量存在、中程度。
 同様に、築成土、その後の少量存在、中程度。
 同様に、築成土、その後の少量存在、中程度。
 同様に、築成土、その後の少量存在、中程度。
 同様に、築成土、その後の少量存在、中程度。
 同様に、築成土、その後の少量存在、中程度。
 同様に、築成土、その後の少量存在、中程度。

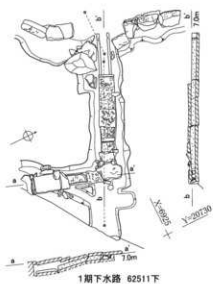
第69図 FKJ06-2・3 (B街区) 遺構配図 (S=1/200・1/50)



c池62526 2期平面図



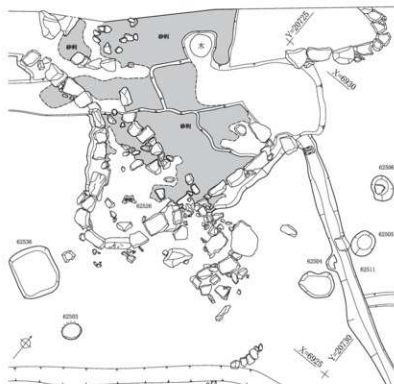
d池62526 1期平面図



1期下水路 62511下

第71図 FKJ06-2・3池62526 1・2期 (S=1/80)

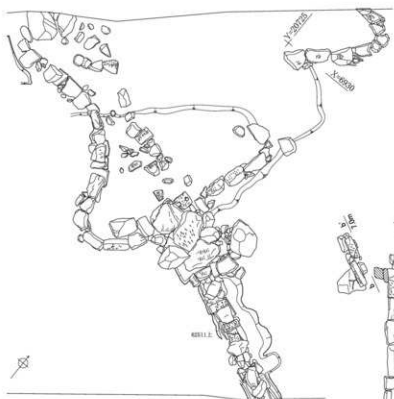




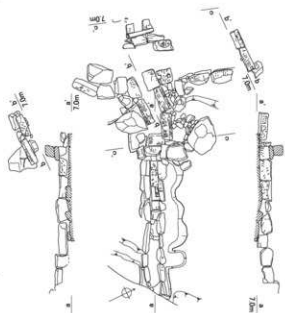
a池62526 4期平面図



3期 62511上取水口石組

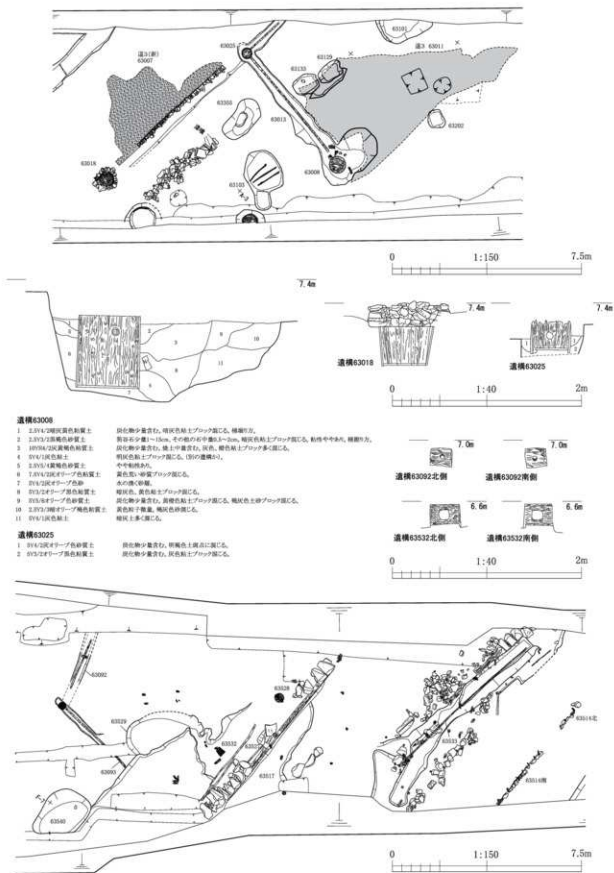


b池62526 3期平面図

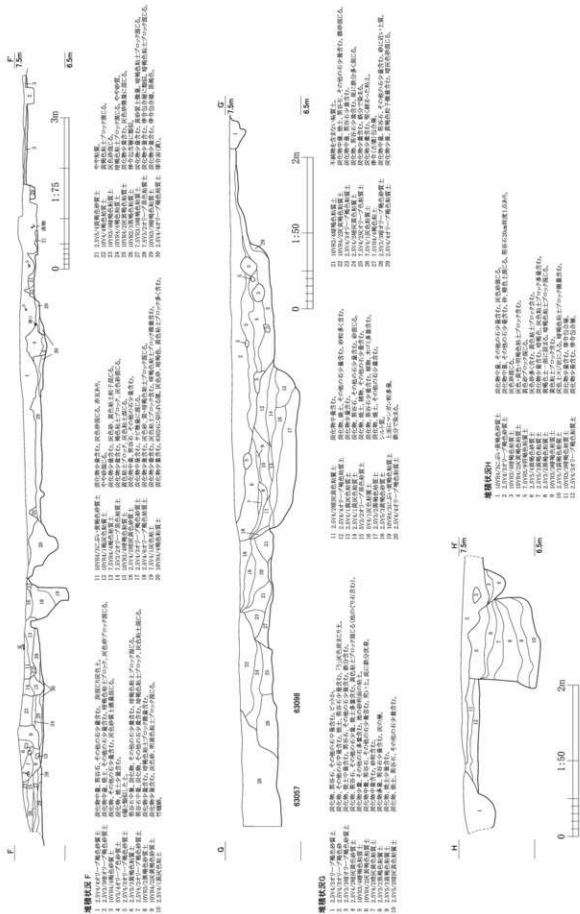


2・3期上導水路 62511上(墓石なし)

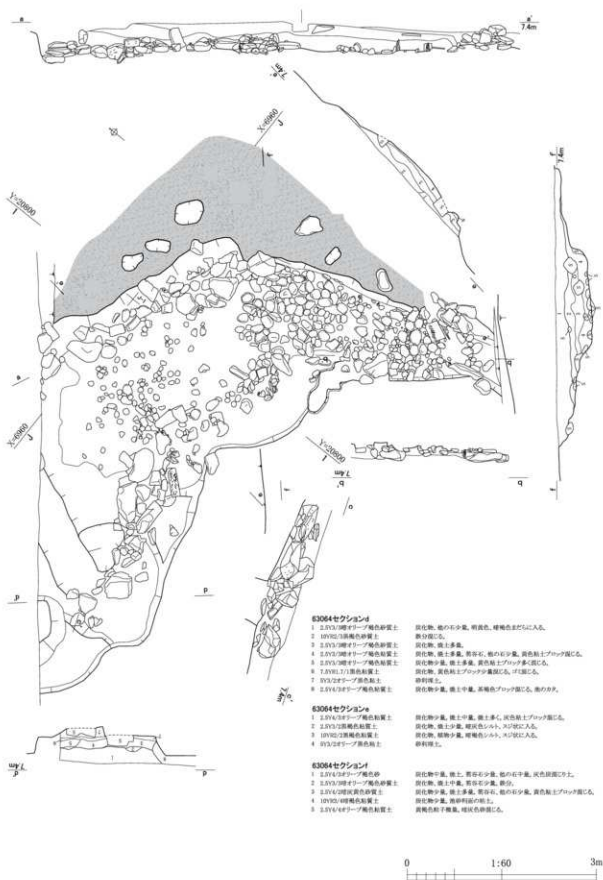
第72図 FKJ06-2・3池62526 3・4期 (S=1/80)



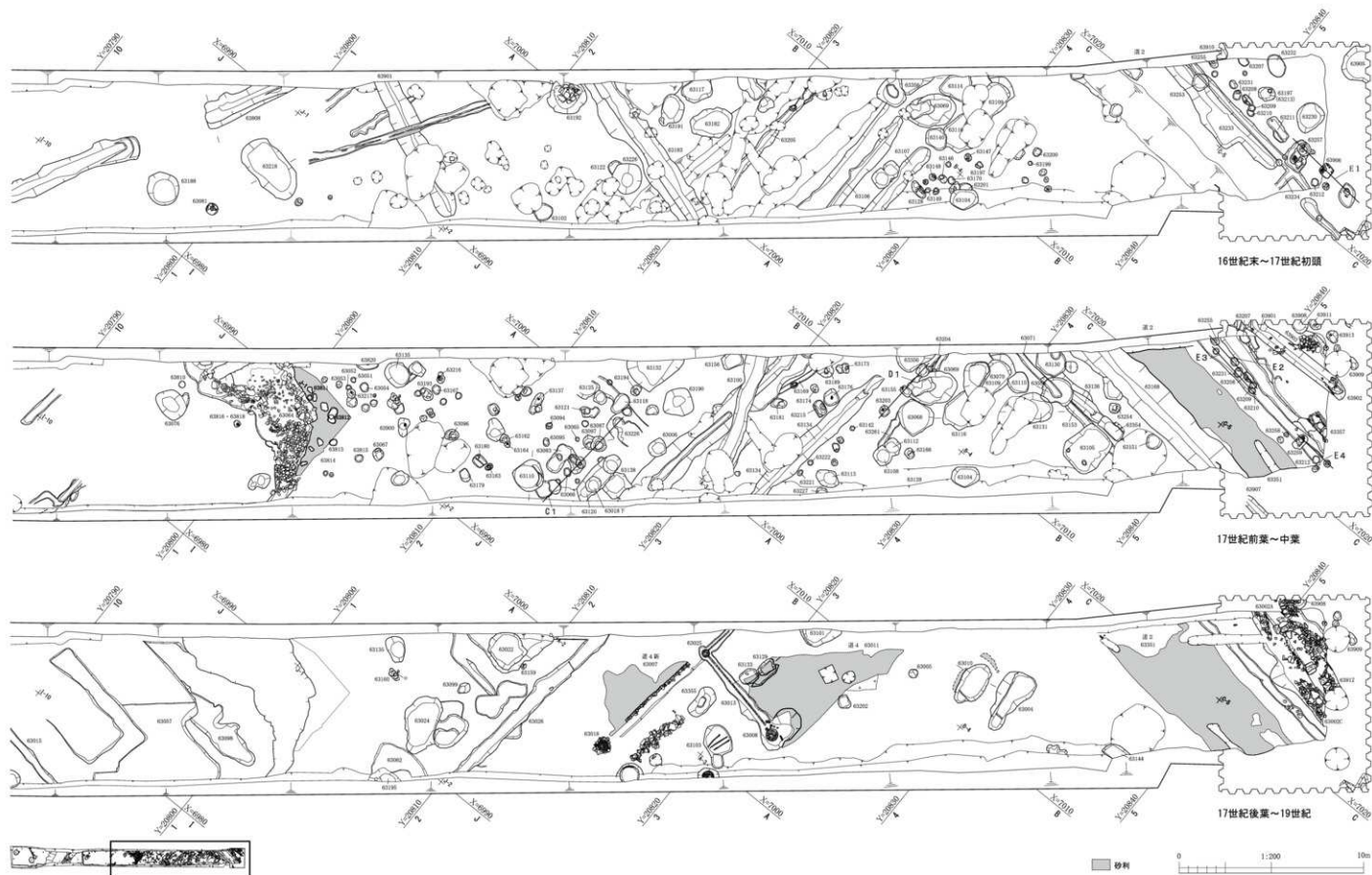
第76図 FKJ06-3 (BC街区) 水道関連遺構 (S=1/150・1/40)



第77図 FKJ06-3 (C街区) 堆積状況 (S=1/75・1/50)



第78図 FKJ06-3 池63064 (S=1/60)



第75図 FKJ06-3 (CDE街区) 遺構配置図 (S=1/200)

第6節 FKJ06-4地区の調査

FKJ06-4地区の概要 この調査区は、長さ約110m・幅6～9mと狭長である(第81図)。調査区南端の矢板に囲まれた部分は、本調査後に拡張し、工事立会として対応した部分である。この調査区の北西に接する地点で、福井市教育委員会(福井市文化財保護センター)が1996・97・2001年度に「福井駅付近連続立体交差事業および市道宝永清川線改善事業に伴う発掘調査」を実施している。その調査では福井城の外堀・土居と、土居の内側に6～9軒分の屋敷地が確認された。

今回確認した主要な遺構は、屋敷地境を為す区画溝と砂利敷道路、芝原上水から上水を引く水路、井戸、柱穴、土居・堀などである。これらに伝わる福井城下の絵図との比較から、5軒分の屋敷地に該当することを確認した。なお、確実に中世にのぼる遺構・遺物は確認していない。

確認した屋敷地は、調査区南端から区画溝64002・3まで(屋敷地⑤)、その溝から水路64012・砂利敷道路2まで(屋敷地④)、その道路から区画溝64008まで(屋敷地③)、その溝から区画溝64065・砂利敷道路1まで(屋敷地②)、水路64027と土居に挟まれる部分(屋敷地①)と区別される。このうち、屋敷地④・①は、福井市文化財保護センター(以下、市センター)報告(青木元邦編2004「福井城跡Ⅳ」)の「山上」・「多賀谷」・「成瀬」屋敷地と「横山」屋敷地に、それぞれ該当する。また、屋敷地④・③境の水路64012・砂利敷道路2は市センター報告の水路1・2・道路2と、屋敷地②・①境の砂利敷道路1・水路64027は市センター報告の道路1・水路4と、それぞれ一連のものである。

また、区画溝は、それぞれ何度も改修や掘り直しの為されたことが確認されるが、場所に大きな変化は認められない。そのため、屋敷地区画は江戸時代を通して大幅な変化がなかったものと捉えられる。このことは、藩により定期的に作成された福井城下の絵図にて、この付近の屋敷地区画が僅かに変化するものの、大規模な区画整理が認められないことと符合する。

屋敷地の北東に堀・土居がある。堀は、荒川・足羽川と一連となり福井城郭を大きく取り囲んでおり、輪郭式の城郭を全周する最も外側の堀であることから外堀と通称される。ここでもそれに倣い、外堀と称して報告する。土居(土塁)は外堀の内側に沿って延びており、城郭西辺の足羽川から神明神社にかけての部分と各城門の周囲については高石垣(石塁)となる。なお、足羽川に面する部分については土居がなく、石垣はあるもの高石垣とはならない。

以下、南側から各屋敷地・外堀・土居を説明する。

1 屋敷地⑤(第82・83図)

主要な遺構は、区画溝64002・3、土坑64009・11・15などである。

区画溝64002は、東から南へ直角に屈曲するため、屋敷地⑤の北西隅に該当することが考えられる。区画溝64003は、直線的に延びて屋敷地④との境を成す。区画溝64003からは17世紀後葉以降、溝64002からは18世紀後葉以降の遺物を確認しており、屋敷地が縮小したことが捉えられる。

土坑64015は、底面付近にて10点近い土師器皿を確認した。土坑64009は、溝64002と区画溝64003の間に営まれており、埋没のたびに溝とともに何度も再掘削されている。この屋敷地の土坑中より確認した遺物は、いずれも18世紀中葉～19世紀のものを中心とする。

屋敷地⑤は、慶長年間の絵図に屋敷地④と分割されず山上右近邸の一画として表現されるものがあるが、慶長18(1613)年頃の「北之庄城郭図(北庄家中国)」では分割して表現されている。17世紀半ばには柳下氏の屋敷地となり、以降江戸時代を通して存続する。これは区画溝64003から確認される遺物

が17世紀後葉以降の所産であることと符合する。また、溝64002の埋土中から「天草町 柳下勘七 倅 久之丞」と線刻された透子札が出土しており、この屋敷地が柳下邸であった蓋然性を高めている。なお、正徳4（1714）年の絵図（第8図）に「柳下勘七」の名が見える（第31表）。屋敷地の正面（表門）は南側であり、調査地は裏手に当たる。そのため、建物に直接関わる遺構が確認されなかったものと見られる。

2 屋敷地④（第84～89図）

主要な遺構は、水路64012、溝64070・72、井戸64095・251などがある。

水路64012は、屋敷地東側を区画する位置にあり、南側へ上水を通す役を担う（第88図）。埋没による複数回の掘削と位置の移動が窺える（第89図）。当初、溝64069として整備されたが、西に移動し水路64012として再整備される。さらに、拳大～0.3m大までの笏谷石を多く含む土壌にて埋め立てられ、西側に再々整備される。その後、幾度かの改修が為され、近代（64028）にも存続した。疎らながら杭列が確認されることから、板材などによる護岸の為された時期があるようである。溝64069では17世紀初頭～後葉、水路64012では18世紀後葉～19世紀中葉、64028では19世紀中葉以降の遺物を確認した。

溝64070は、両壁面に石列が並ぶ（第84・86図）。いずれも一石のみの検出であるが、本来は数石積まれた石組溝であったと見られる。使用される石材は、扁平な石材が多く、比較的丁寧に加工される。いずれも笏谷石であり、拳大～0.8mを超える大きさのものがある。西側石列中央付近の一石材に刻印が認められる。溝64070の南側は素掘りの溝64033に接続して一連となり直線的に延びるが、北端のみ北東へ屈曲する。なお、検出時には、笏谷石破片で溝内の屈曲部付近を閉塞した状況であった。

溝64072は、東壁面北端にのみ石組が残存する（第84・86図）。使用される石材は、拳大～0.5m大の笏谷石であり、比較的扁平な石材が多い。高さ0.4～0.5mに積み上げられた状態である。溝64072は、北から南東へ緩やかに湾曲しており、底面は南東へ向って緩やかに下降する。

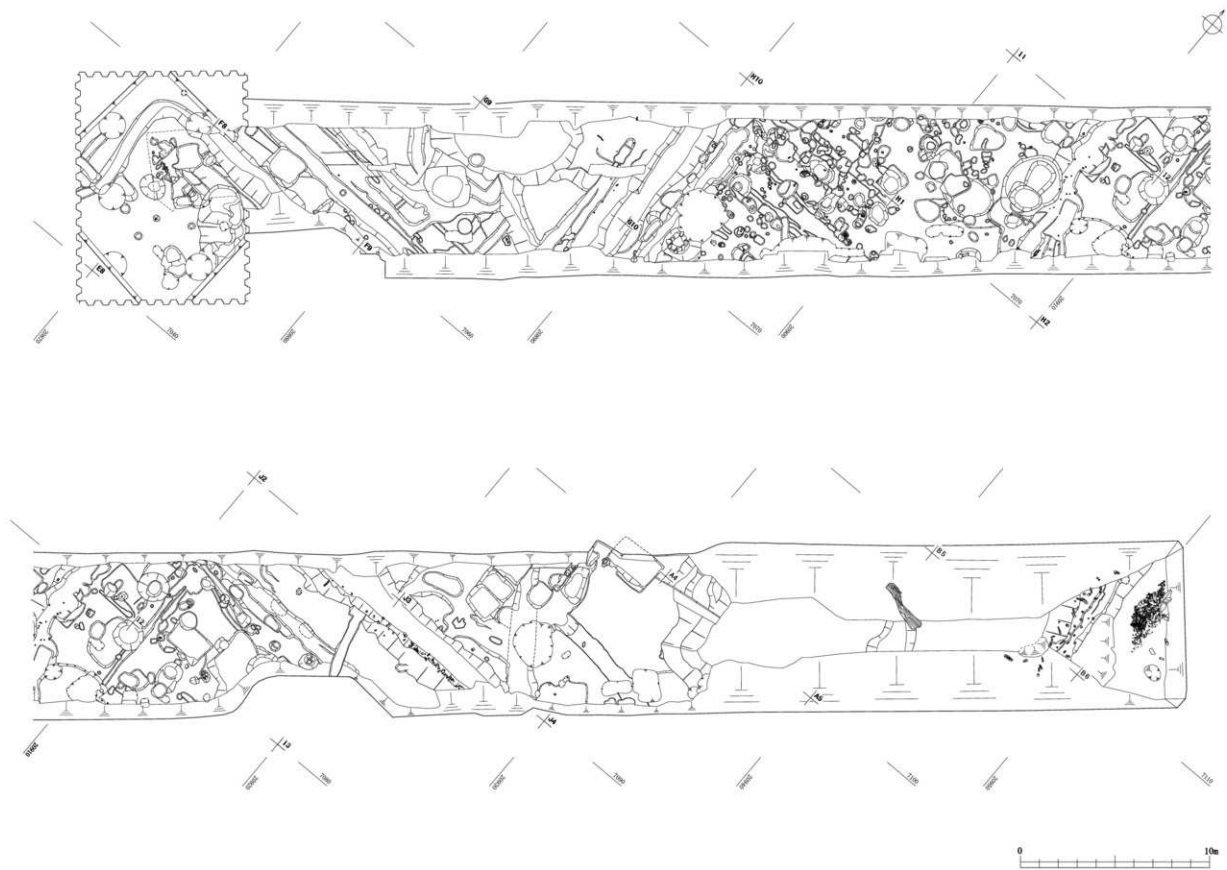
この他に、桶と木箱を埋設した遺構64217がある（第84・87図）。桶は底が抜かれず、底板が楕円形で、木箱は長方形である。両者とも一つの掘り方内に据えられている。なお、桶の位置は、溝64070西側石列の屈曲部分直下に当たる（第84図）。

屋敷地④は、市センター報告の「山上」・「多賀谷」・「成瀬」屋敷地に該当する。慶長期の絵図では山上右近邸であるが、17世紀半ばには多賀谷金右衛門邸となる。次いで17世紀後葉には成瀬氏の屋敷地となり、以降江戸時代を通して存続する。屋敷地の正面（表門）は北側であり、調査地は裏手の南東隅付近に当たる。そのため建物を構成すると見られる遺構は確認されなかったが、複数回の改変の状況を確認することができた。改変の状況は以下のとおりである。

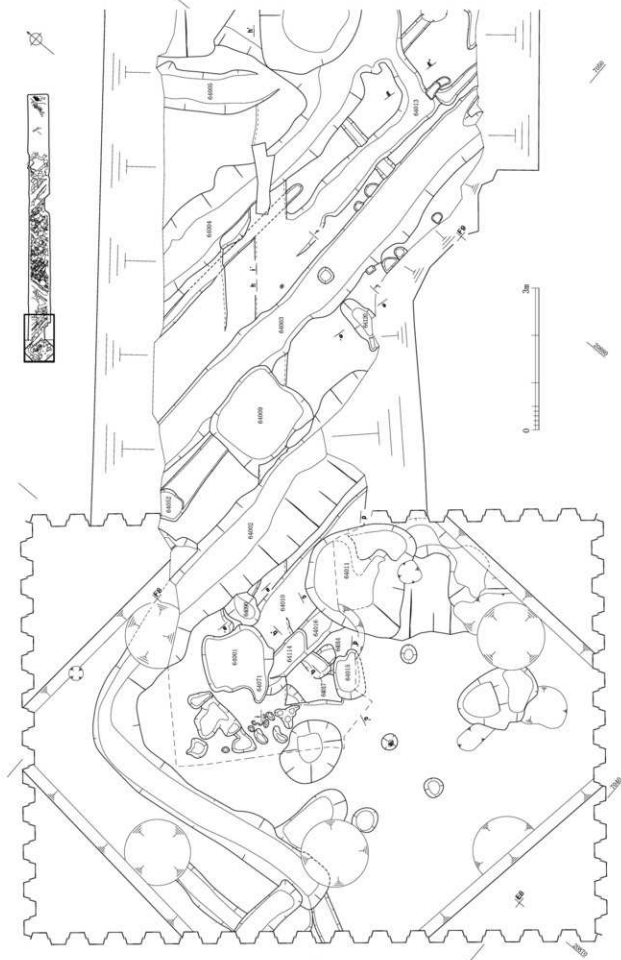
17世紀半ばまでは、南北9m・東西7.5mの大きな池状の窪地（64006）があった（第85図4層目）。そのうち調査時に認識し得た2箇所深い部分を64006-1・6-2とした。池状窪地64006は、人為的に埋め立てられており、17世紀半ばの多賀谷邸の段階には、一度更地の状態になったようである。

17世紀後葉には成瀬邸となり、溝64072や遺構64217などが構築される（第84図2層目）。18世紀半ばには、全城が嵩上げされ、溝64070・33や井戸251などが整備されることとなる（第84図1層目）。

最終的にさらに嵩上げされ、溝64046や土坑64007が構築されるが、これらについては近代に下る可能性がある（第108図）。なお、溝64046は、大きく湾曲する石組の溝であり、溝64070上に一部重複して構築される。石組石材は、0.2～0.5m大の鑿加工痕の残る笏谷石を4石程度積み上げている。



第81図 FKJ06-4 遺構配置図 (S=1/200)



第82図 FKJ06-4 屋敷地⑤ 選構配置図 (S=1/80)